天然王女の婚約者

羽月 紫苑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天然王女の婚約者

【Ｎコード】
Ｎ３７４６Ｘ

【作者名】
羽月　紫苑

【あらすじ】
「私は、ふざけた女性は嫌いなのですが」
ルーン王国の王女、天然なリイナは、婚約者のイル王子にそう言われた。その言葉の意味することは、イルがリイナを嫌いだということ。
「初対面でそれはなんですか！」
と、短気なリイナは彼を殴った。そして
「姫様へのご無礼は神様が許しても私が許しません！！」と侍女のナミまでも、イルを目の敵にする。

そして、イルの国、レフシア王国で出逢った変態第二王子はリイナに――――――？

「私は、ふざけた女性は嫌いなのですが」

「リイナ様！　お早く！　もう陛下は大広間にお着きですよ！」

侍女の慌てた声に、私はおろおろと走る。

「い、今行きますッ！！」

どたばた、という効果音が聞こえて来そうな私の様子に、お母様はため息をついた。

お母様に言わせると、私はいつもどこか抜けているらしい。国王であるお父様もお母様も、どちらかと言えば切れる方だ。……私自身、一体誰の血かと疑いたくなる。

私は、本当にお母様とお父様の娘なのだろうか。

……なんて、シリアスなことは考えない。だって私は、天然だから。

「お、お母様ッ！！　遅れてしまって申し訳ありませんッ！」

ぺこぺこと、私はお母様に謝る。怒ると怖いんだ、これが。お母様は私を見て、もう一度、大きくため息をついた。

「早く、大広間へ行きましょう。もう隣国のイル王子は待ちくたびれているわ」

お母様の言葉に、私はこくこくと頷く。決められていただけで会ったことも無い婚約者なんて何時間……いや、何日待たせたって罪悪感はないけど、国の為だもんね。

そんな私を見て、お母様は苦笑交じりに呟いた。

「でも、婚約者と初めて逢う日に寝坊するなんて、貴方らしいわね」

＊＊＊＊＊＊

大広間に、煌びやかな一行がいた。
このルーン王国の隣国、レフシア王国の王子の一行である。
むすっとした王子の前には、王座。そしてその王座に座っている王は、冷や汗をだらだら流していた。

（あの馬鹿娘。なぜ今日と言う大事な日に寝坊などするのだ！！）

心の中で文句を言いながら、顔はなんとか笑顔を浮かべる。といっても、人から見ればそれは笑顔には程遠かった。

「こ、国王陛下ッ！！」

慌てた様子の侍女が、扉を勢い良く開けて入って来た。

「どうした」
「リイナ様が、ご到着です」

侍女の言葉に、王ははぁーっとため息をつく。

「やっとか……通せ」
「はい」

侍女が扉の奥に引っ込んだのを見ると、王は王子……イルへ視線を移した。
マッハで、顔に愛想笑いを浮かべる。
「お待たせして申し訳ありません。娘の準備がやっと整ったようです」
王の言葉に、イルは少し微笑んで頭を下げた。
もちろん、心の中では遅刻した王女に怒りが沸騰だ。
「……お父様、お客様。お待たせして申し訳ありません」
扉の向こう側から、蚊の鳴く様な王女の声がした。ぎぎぎぎ……と、扉がゆっくり開く。
現れたのは、緩くウェーブした金髪で、緑の瞳の美しい少女だった。真っ白な肌によく合う、薄いブルーのドレスを着ている。リイナである。
リイナは、イルの方を向き、深くお辞儀した。
「イル王子陛下。また、その御一行様。お待たせして、本当に申し訳ありません。
ルーン王国第一王女、リイナ・レンスリットと申します」
リイナに、イルも頭を下げる。
「お初にお目にかかります、リイナ王女様。
レフシア王国第二王子、イル・アヴィンセルと申します」
優雅に礼をするイルを見て、リイナの頬は赤く染まった。
にっこりとほほ笑みを浮かべ、ゆっくりとリイナはイルに近付く。

そして――――

「イル様……。これから、どうぞよろしくお願いしま……ッ」

転んだ。ずべっと間抜けな効果音が聞こえてきそうなくらい激しく。

「きゃあっ！」

悲鳴だけは王女らしく、転び方は派手に。そんなリイナを見て、イルは凍りつく。

そして、やっと彼が口にした言葉。それは――――

「……私は、ふざけた女性は嫌いなのですが」

「私は、ふざけた女性は嫌いなのですが」（後書き）

息抜きで書きました。
甘い目で見てくださ（ｒｙ。　嘘です。どんどん間違いなどの指摘、して頂けると助かります。

……そして、時間無いとか嘆いてるのに掛け持ちしてすいません（汗）。

「殴った私に非はありますか？」

「私は、ふざけた女性は嫌いなのですが」

イル様がそう言った瞬間、場の空気が凍った。

分かる。いくら天然で空気が読めないと言われる私だって分かる。

この場の温度は、絶対０度以下だ。

「……イル殿？」

お父様が、震える声で呟いた。今聞いたことが信じられない、という口ぶりだ。

でも、私にはよく分からない。イル様は“ふざけた女性が嫌い”と言っただけで、私を嫌いとは言ってないのに。

「……イル様、何故今それを言うのですか？」

私がきょとんというと……イル様は、さっきよりもっと怖い顔をした。

待って下さい。それ、婚約者に向ける顔ではないです。

「リイナ姫……私は、ふざけた女性が嫌いだと言ったのだ。今、ふざけた女性が貴方以外のどこにいる」

イル様の言葉に、今度は私が固まった。

え……今、私のこと嫌いって言った？　婚約者に？　初対面なのに？

「り、リイナ……」

お父様が、おろおろと私に話しかけてくる。
でも……私の心は、いらいらでいっぱいだった。
初対面の婚約者に、“嫌い”って何？　あんたは、それでも、一国の王子かぁぁぁ！！
心の叫びと共に、私は一歩踏み出した。
そして、丸めた拳でイル王子の顔を殴る。美系が台無しになったって、構うものか。

「きゃ……ッ」

侍女の一人が、びっくりして声を上げた。
お母様が呆気に取られて、

「リイナ……女なのに、拳で……せめて、平手で……」

と呟いているのを聞いて、私ははっとした。
そうだ！　王女なのだから、平手じゃないと！！　拳だなんて、男の人の殴り方だ。
よし、今更だけど、平手に変更しよう。
そう思って、深く息を吸った時――――

「リイナ姫。これはなんの御冗談かな？」

ごごごごごと燃え盛る炎の音が聞こえそうなイル様が、私を睨んだ。
そこで、ふと思いだす。イル様は、私の婚約者だった……。

「あ、あ、あ、……」

お父様がパニックになって、言葉にならない声を漏らしている。
あちゃー……どうしよう。この国最大のピンチとか、私招いちゃったのかな……。
でも、と私は考え直す。
先に喧嘩を売って来たのはイル様だ。私はそれを買っただけ。売られた喧嘩を勝って何が悪い。

「失礼ですがイル様。先に私に“嫌い”と言ってきたのは貴方の方です。
私はそれに怒ってイル様のお顔を殴っただけ。非なら、イル様にあるのでは？」

ひ……、と、お父様が息を飲むのを感じた。
イル様は、冗談の通じない堅物で短気な方と有名だ。
それが何だ。だからって、私が彼にかなわない理由じゃない。私だって、天然だけど短気なんだ。

「イル殿、娘が大変失礼を！！　娘は人とは少しばかりずれていまして……どうぞ、許してやってください」

お父様、黙って。私は目だけでお父様にそう伝える。
馬鹿な、とお父様も目で私に言ってきた。
私は無視して、イル様の方を向く。

「イル様。私に謝ってください。初対面で“嫌い”などとは、許しがたい愚行です」
「なんと……私に、謝れと？」

私より身長の高いイル様は、上から怖い目で私を見てくる。
なんだか、悔しい。これからは、牛乳をたくさん飲むことにしよ

う。

「ええ、もちろん。それが、人の常識でしょう？　まさかレフシア王国の王子がそんなことも御存じないとは、驚きですわ」

口に手を当て、私はほほほ、と笑う。

イル様のこめかみが、ぴくぴくっと動いた。

「まさか。そんなことあるわけがないでしょう。

それより、私こそ初対面で婚約者に手を上げるようなものがルーン王国の王女だなんて、信じられないのですが」

私達の周りを、完全燃焼の白い炎が包む。

不思議だ。イル様といっしょにいると私の天然キャラがどんどん薄くなって言ってる気がする。

「そうですか？　お互い、不思議な国なのですね」

「真に」

そう言って、私達はいっしょに笑いあう。もっとも、その笑いは見ていて寒気のするものだっただろう。

「殴った私に非はありますか？」（後書き）

お気に入り登録してくれた方、評価してくれた方、ありがとうございます。
本当に嬉しいです。

そして……お妃さま、ツッコミどころが違いますよね。
彼女も、実は少し抜けてたりします。

……ちなみに、“レフシア王国”。
この国名を考える時、頭の中に“ラフレシア”と浮かびました（おい）。
……ご存知でしょうか。世界一大きくて臭い花です。

「姫は、乱暴な方なのですね」

「リイナ！！」

お母様に怒鳴られ、私は縮こまった。

「イル様を殴るとは何事ですか！　まったく……肝が冷えましたよ。

分かっているの？　イル様は、貴方の婚約者なのよ！」

「で、でも……」

もごもごと言う私に、

「でもも何もありません！」

とお母様は一括する。私は、むか、と心の中で呟いた。

「じゃあお母様は、全然腹が立たないんですか？」

「そりゃあ……」

そう言って、お母様は目を泳がせる。絶対怒ってるはずだ。私の短気はお母様から受け継いだのだから。

「腹は立っているわ。当たり前じゃないの。大切な一人娘をはっきり“嫌い”と言われて。

でもね、国のことを考えなさい。今回はお互いに非があったから大事にならずに済んだけど、本当に肝が冷えたわ」

お母様の言葉に、私ははあいと項垂れる。

でも、やっぱりなんとなく気に食わない。せめて、と思って、

「……でも、国同士なんて関係なく、私はイル様が嫌いなんだけどなぁ……」

と心の中を呟いてみる。お母様はやっぱり聞いていて、

「あのねぇ……」

とため息をついた。でも、お母様だって嫌でしょ。婚約者に嫌いなんて言われたら。

「リイナ。イル様は頑固な方だけど、とても出来る切れ者なお方なのよ？

それに……お顔も、良かったじゃない」

最後にそう付け加えて、ぽっと頬を赤くするお母様。

ちょっと待ったぁぁぁ！！　お母様、貴女にはお父様がいるでしょ！？　なんで頬を染めるの！！

私が心の中でそう叫んでいるなんて露知らず、お母様はふふっと笑う。

「ね？　嫌いって言われても、不細工な方に嫁ぐよりはずっと良いでしょう？」

私は、少しむくれて頷く。そりゃあ、イル様のお顔は上の上ってくらいかっこいいけれど。

あの黒髪に薄いブルーの切れ長の瞳を見た時は、胸がどきどき高鳴ったけれど。

でも、人間は性格でしょう？　年頃の娘のほとんどは、性格半分

顔半分って言っているのに。

「……私の婚約者は、あんな方だったとは……」

もう一度ため息をつく私に、お母様は苦笑した。

「まぁ、二人で少し過ごせば何か進展があるかもしれないしね？」

＊＊＊＊＊＊

「姫様。訊きましたよ、イル様は素晴らしい美男だとか。街でも、イル様のお話で盛り上がっていますよ」

翌朝、朝一番に侍女のナミが楽しそうに私に言う。待って、なんで貴女まで頬を赤く染めてるの。

そう心の中で呟いて、私はあっと気付く。

ナミは、あの時大広間にいなかった。それに国の王女が婚約者から“嫌い”だなんて言われたなんて広まったら、少なからず混乱が起きるだろうから秘密なのだった。

「そうよ……ナミはイル様の本性を知らないのよ……ッ！　だからそんなことが言えるのよぉぉぉッ！」

「ひ、姫様？」

私を、おろおろと心配そうに見つめるナミ。

「一体、どうなさったんですか？　イル様は、姫様のお気に召さなかったのですか？」

きょとんと私を見つめるナミ。

「その通り。だって私に“嫌い”って言うのよ？　一国の王子が初対面の王女に言うことですか。

しかも、私は婚約者なのに」

そうナミに愚痴を言って、はぁーっと大きく息を吐く。

そして――ナミの様子がおかしいことに気付いた。

「……ナミ？　どうしたの？」

私はきょとんとしてナミを見つめる。ナミは、目を丸くして家をぽかんと開いて、私を見つめていた。

そして、しばらく口をぱくぱくさせてからようやく言葉を発した。

「姫様……今、なんと？」

「……あ」

私は、固まった。そういえば、これは口外してはいけないことだった。

『ま、いいや。私天然なんだし、えへ☆』で済むことじゃない。

「……姫様は、本当にイル様にそんなご無礼なことを言われたのですか……？」

ナミが、もう一度問うてくる。どうしよう……。

ナミは、私が幼い頃から仕えてくれている優しい侍女だ。とても私のことを好いてくれている。

でも、そのせいか、私に関することでは鬼のように怒る。例えば、

今回のような時とか。

「……イル様は、どこにいらっしゃいますか？」

「……え、ナミ？」

マイナス１００度なナミの言葉に、私はおろおろとした。

だめ。このままじゃ、ナミは昨日の私リターンズになってしまう。

今すぐにでも、イル様を殴りに行くだろう。

「姫様に“嫌い”と？　なんたる無礼。姫様はこんなにも美しく可愛らしいというのに……ッ！！

姫様、早くイル様はどこにおられるかお教えくださいませ！」

「ちょ、ナミ！　ダメでしょ！　貴女がイル様を殴ったらそれこそ大変なことになるわ！」

「姫様に言われたくありません！」

何気に酷い事を言ったナミを、私は力づくで抑える。その時――

―扉がふいに開いた。

「……これは」

扉のすぐ傍で目を丸くしてとっくみあっている私とナミを見ているのは、あろうことかイル様。

嫌なものを見る目つきで、私をしばらく見つめる。

そして、彼は言った。

「……姫は、乱暴な方なのですね」

「姫は、乱暴な方なのですね」（後書き）

ジャンル別恋愛デイリーランキングで、４６位にランクインしていました！！
ありがとうございますッ！！

そして、お気に入り登録１０件突破！！
ほんとにほんとに感謝です！　これからも、よろしくお願いします。

「姫様へのご無礼は神様が許しても私が許しません！！」

「……イル様、それは女性に言う言葉としてどうかと思いますが」

私は、ふるふる震えながら言う。ああ、どうしよう。右手が今にもイル様の顔にヒットしそうだ。

イル様の右頬が、左頬より赤いと思うのは、私の気のせいじゃないはず。

あれは、私が殴ったからだ。

だから、今回はなんとか怒りを治めねば……。そう私は、自分自身に言い聞かせる。

でも、自分に言い聞かせるのに必死で———

「……イル様。姫様へのご無礼は神様が許しても私が許しませんよ」

私の隣でナミから青い炎が出ていたことに、気付かなかった。

私が慌てて隣を見ると、構えをとっているナミ。

「ちょ、ナミ！！　だめでしょ！！　抑えて抑えて！！」

「いいえ姫様、止めないでください！　姫様を侮辱する者を殴るのは私の勤め！！」

「待ってーっ！！　だめ、だめ、イル様は隣国の王子様よ！」

私はばたばた暴れるナミを、力づくで抑える。と言っても、怒ったナミの力は尋常ではない。

「ちょ……な、み……ッ」

「姫様、お手をお話下さい！！　私に、イル様を殴る許可をッ！！」
「そんな許可出せるわけないでしょっ！！」
喚きあう私達を、一歩引いて見ているイル様。
ちょっと、何してるんですか！

「イル様！！　早くお逃げください！　ナミに殴られます！！」
「……そのようだが……まさか、隣国の侍女ともあろうものが、一国の王子を殴らないだろう」

そう言って、イル様はふっと笑う。
違います。それが殴るんです。その美しいお顔をこれ以上傷つけられなくないなら逃げてください。
と、私が心の中でそう言った瞬間にはもうアウトだった。
ナミが、私の腕の中を脱出し、イル様の方へ右手を突き出す。
ナミの力強い右ストレートは……空を殴った。

「……え？」
「あれ？」

私とナミは、きょとんと空を見た。
あそこにいたはずの、イル様は？　イル様が、いない。
きょろきょろとする私の後ろから、

「……まったく、一体この国はどうなっているんですか」
ため息交じりの声が聞こえた。

「え、ええっ？」

慌てて後ろを振り向くと、そこにはイル様の姿。
何今の。瞬間移動？
「イル様……なぜ……え、早い……」
「……リイナ姫。貴女も貴方ですが、侍女も侍女ですね」
私の言葉を遮って、暴言を吐くイル様。
ちょっと、何？　“貴女も貴女ですが侍女も侍女ですね”だぁ？
「……イル様、そこにお直り下さいませ」
「……は？」
イル様は、怪訝そうに眉をひそめる。
直らなくても良い。私は、すうっと息を吸った。
ナミみたいに、避けられないように猛スピードで。幼馴染で騎士のユアンに教えられたように、拳に全体重をかけて……。
「やぁっ！」
王女らしくないかけ声と共に、私はイル様に向かって拳を突き出した。
絶対当たる。そう思った。なのに……
「……リイナ姫。昨日のことと言い今日の侍女と言い貴女と言い、なんなのですか。
貴女は、私に喧嘩を売っているのですか？」
イル様は見事に避けて、醒めた顔で私を見ている。
私はぽかんと、自分の右手をイル様を交互に見る。

「え……なぜ……？　だって、さっきのはユアンに教えてもらった絶対に殴れる方法……」
「……なぜ貴女は、婚約者に対して絶対に殴れる方法を使うのですか」
イル様はそう呟いて、再度ため息をつく。
「リイナ姫。私達は――非常に不本意ですが――婚約者なのですよ。
しかも、ただ婚約ではありません。私達は、それぞれの国の長。私達が決裂したら、戦まで考えられるのです。
ですから、その諍(いさか)いの原因になるようなことは、やめましょう」
私はぽかんとして、そのイル様の言葉を聞いていた。
なんだ、けっこう大人じゃない。そう思う反面、自分が子供に見えるのが気にいらない。
「……分かりました」
私はそう呟いて、振り上げていた拳を下ろす。
イル様は頷いた。そして、口を開く。
「貴女に、お伝えしたいことがあるのです」
「はい？」
硬いイル様の表情に、私は嫌な予感がした。
そして……その予感通り。イル様の口から出た言葉は――――
「父上……レフシア国王より、“我が国にしばし、遊びに来ない

か”と……」

「姫様へのご無礼は神様が許しても私が許しません！！」（後書き）

ナミ……なんか、思ったよりも濃いキャラに↑

そして、アクセス２０００突破致しました。ありがとうございます！
お気に入り登録も増えましたッ！！
読者様、感謝でいっぱいです。これからもよろしくお願いします。

「あんな方が、姫様の婚約者なのですか？」

「……今、なんと？」

私は、震える声で聞き返す。イル様は表情を変えず、

「ですから、“しばし、我がレフシア王国へ来ないか”と、父上は仰っております」

「……」

私は黙って、イル様を見つめる。

“蛙の子は蛙”という。つまり、イル様がこんな性格なのはたぶんイル様のお父様とお母様の遺伝で……だとしたら、やっぱり……うん、お父様とお母様も、こんな嫌な性格のはず。

『行きません！！』と言いたいけど、これでも婚約者。それは許されない。

「それは、嬉しいお誘いですわ。是非、行かせてください」

口元に手を当て、ふふふ、と愛想笑い。

「それは、良いお返事が貰えて良かった。早速、父へ知らせますね」

イル様もにっこり笑う。でも、私にだって分かる。絶対これは、愛想笑い。

その愛想笑いのまま、イル様は出て行った。

「……はぁーっ！！」

大きく息をつき、ベッドにダイブする。
だめだ……イル様といると、肩が凝る。
「姫様……あんな方が、姫様の婚約者なのですか？」
ナミが心配そうに私を見る。
「ええ……ほんっと、嫌な男でしょう？」
ため息をつきながら、私は頷いた。
「ええ、嫌な男ですね。姫様への発言には驚きました！
本当に、首の骨を折ってやろうかと思いましたよ。料理長に、肉切り包丁でも借りてこようかしら……」
ナミはイル様の出て行った扉を見つめて、しかめ面で毒づく。
「ちょっと……。“嫌な男”呼ばわりしたなんてバレたら、大問題よ？
確かに、イル様は嫌で嫌で仕方ない大嫌いな男だけど」
私はナミに苦笑して言う。ナミは、はい……としょげた。
「……姫様は、レフシア王国へ行くのですよね」
「ええ。非常に不本意だけどね」
「つまり、イル王子様のご両親にもお会いするのですよね」
「ええ。蛙の子は蛙、というように、蛙の親も蛙でしょうね。逢いたくないわ」
「では、私もご一緒していいですか？」

「ええ。そうね、貴女もご一緒し……え！？　ナミ、貴女もレフシア王国へ！？」

驚いて大声を出した私に、ナミは頷く。

「ええ。それに、私は姫様の第一侍女ですし、いっしょに行くことになると思います」

「それは……そうかもしれないわね。ありがとうッ、ナミ！！」

私は思わず、ナミに抱きついた。

見知らぬ異国で嫌な相手と過ごす時間も、ナミがいたら大分良くなる。

「それより姫様、国王陛下にお伝えしなくて良いのですか？　出来るだけ早めにお伝えした方が良いのでは？」

私に抱きつかれながら冷静に発された言葉に、はっとする。

そうだった。いつから行くのかは分からないけど、出来るだけ早めに伝えておいた方が良いだろう。

「ありがとうナミ。じゃあ、今から伝えに行くわ。

……そうだ、従者として、ユアンも来るように、お母様にお伝えするわね！」

「えっ、ひ、姫様ッ！！」

私が“ユアン”と言った途端、ナミは顔を赤くする。

ユアンは、この城に仕えている騎士だ。私に殴り方を教えてくれた幼馴染でもある。体術も凄いけど、剣がとても上手い青年だ。

そして……彼とナミは恋仲である。ナミの方が、１０歳くらい年上だけど。

「あ、あの、ユアンは、王城の警護ですし！！　異国へ行くのは……ッ！！」

おろおろと言うナミ。

「あら、なぜ？　王城の警護なんて一人くらい抜けても平気だし、ナミだってユアンが居た方が楽しいでしょ？」

「それはそうですけど……ッ！　でも、ほら、ユアンをレフシア王国につれて行かなくても……ッ！！　ほら、姫様、分かるでしょ？」

そう言いながら、ナミは赤面する。え、何？　何なの？　分かんないわよッ！！

「遠回しに言わないで！　何なの？　何か都合悪いのッ？」

「だ、だって……ユアンといっしょに異国まで行ったら、私達、ハネムーンになっちゃいます……。

私は姫様のお世話をしなければならないのに、きっと、二人で……」

そう言って、きゃあっと頬を赤く染めるナミ。

……幸せ者ね。

「そう……。そうね、貴女がユアンにばっか構ってたら私はイル様と二人っきりになっちゃうものね」

私はそうため息をついた。

好きじゃない人と結ばれるのは、私だけか……。

「じゃあ、お父様たちに話してくるわ……」

私はそう言って、まだ頬を赤く染めているナミを残して部屋を出た。

＊＊＊＊＊＊

「ということなんです、お父様、お母様」

私は、イル様の話を両親に言った。お父様とお母様は顔を見合わせる。

「その話なら、もう聞いているわ。楽しんで行ってらっしゃい」

お母様が、そう言ってにこっと微笑んだ。もう知っていたのね……。

「分かりました。……楽しめるかどうかは不安ですが、行ってきます」

私の言葉に、お母様は苦笑する。仕方ないじゃない、だってイル様の国よ？　楽しめるはずがない。

「まぁまぁ、そんなことを言わないで。

それより、さっきレフシア国王様からの鳩便が来たのだけど、いつでも歓迎のご用意は整っているそうよ。だから、出立は明後日でも良いかしら？」

「明後日！？」

私は思わず大声を出した。

「そんなに早くですか？」

「……苦虫を噛み潰したような表情はやめなさい。レフシア国王様に失礼でしょう」

「……はい、お母様」

明後日には、私はレフシア王国に旅立つのか……。

そう思うと、心が重くなった気がした。

「あんな方が、姫様の婚約者なのですか？」（後書き）

なんか……タイトルに良さげな台詞がなかっ（ｒｙ。
お気に入り登録２０件突破しました。ありがとうございます！

そして、週間ランキング７８位！！
本当にありがとうございます。

ちなみに、年齢設定は、
リイナ→１６歳　イル→１８歳　ナミ→２４歳
そして、ユアンも１６歳です。リイナと幼馴染の同い年なので。

「外見だけは美しい……姫のようですね」

「えぇぇぇ！？　あ、明後日ですかっ？」

目を丸くするナミに、私はため息をついて頷いた。

「そうよ、明後日なの。急すぎるでしょう？　もう、お母様ったら、たぶん私が行くって言う前にもう話をつけていたんだわ」

「お妃様、姫様に聞かずに？　さすがお妃様というか、姫様の話を聞くべきというか……」

「本当にそうよね」

私ははぁーっと2度目のため息をつく。

「とにかく、早めに荷造りをしてちょうだい」

＊＊＊＊＊＊

そして———あっという間に、日は過ぎた。

嫌なことが待っているほど日は早く過ぎる、とはよく言ったものだ。

「今日、ですね」

ナミの言葉に、私は頷く。

もう、外に馬車は来ているし、私も出掛け様のドレスに着替えた。

もちろん、ナミもいつのも侍女の制服ではなく、出掛け様の服に着替えている。
イル様も、同じ馬車に乗るらしい。噂では、イル様は居やがったがレフシア王国の国王陛下が無理矢理そうしたとかなんとか……。迷惑な国王もいたもんだ。
ため息をついた時、

「リイナ、準備は整った？」

ノックの音と共に、お母様が部屋に入って来た。

「まぁ、綺麗じゃない！　貴女はやっぱり美人だわ」

お母様は私を見てにっこりする。
そして、私に近づく。

「いい？　レフシア王国についても、堂々としているのよ。お願いだから、イル様に失礼なことをおっしゃったり、失礼なことをしたりしないで」
「はい……」

“イル様が、先に私に失礼なことを言ってきたらどうするの”。
その言葉を、呑み込んだ。

「良い子だわ。じゃあ、下におりましょう。ナミ、貴女もね」
「はい、お妃様」

＊＊＊＊＊

王城の前の広場には、豪華な大きい馬車。そして、それを見る民衆たち。

「イル王子も、馬車の中にいるみたいだぞ！」「きゃあっ、あのかっこいい王子様？」「見たい！　見たいわイル王子の顔！！」

そんな声が、民衆から聞こえる。

私は、深呼吸してその中に出て行った。

「リイナ様！！」「王女様だ」「いってらっしゃい！」

民衆の歓声に、私は笑顔で手を振る。

馬車に向かって歩くと、扉が開いた。中から、深い青の服に身を包んだイル王子が現れる。

「リイナ姫。このたびは、我がレフシア王国へ来て下さることになり、誠に嬉しいです」

そう言って、イル王子はふっと微笑む。その柔らかな微笑みに、町娘達は悲鳴を上げた。

でも、それはイル様の性格を知らないから。私は分かる。あの人は、“誠に嬉しく”ないだろうと。

でも、私だってお母様に“失礼なことをしないで”と言われたばっかりだ。

「私も、お招き頂き誠に光栄ですわ」

そう言って、私は膝を折る。イル様は微笑んで頷いて、手を出した。

またまた上がる、町の娘達の悲鳴。
私は、微笑んでその手を取った。引かれて、馬車に乗り込む。
そして――あろうことか、イル様までも同じ馬車に乗り込んだ。

「い……ッ！？」

叫びかけた。でも、今叫んじゃ駄目。そう思って、なんとか堪える。
ナミも馬車に乗り込んで、やっと扉が閉まる。

「なぜ、イル様も同じ馬車にっ！？」

閉まった途端、私はそう叫んだ。

「なぜも何も……父上の案です。私が、自分から貴女と同じ馬車に乗ると思いますか？」

……そうですね、思いませんよ、私も。
でも、イル様のお父様は、よほど私とイル様をくっつけたいらしい。“婚約者”になっている時点で、もうくっついているも同然なのだけど。

「だから、仕方ないのです。レフシア王国の王城までは、約三日間の旅。しばらく、我慢しましょう」
「……そうですね。今のうちから、慣れないといけませんものね」

私は頷いて、窓の外を見た。
いつの間にか、外には綺麗な草原が広がっている。そして、遠くに王族の別荘が見えた。

「綺麗な邸ですね」

イル様が、別荘を見て呟く。

あの邸は、美しい邸としては三本指に入るだろう。たくさんの薔薇にかこまれて、アーチには繊細な彫刻が掘られている。

「でしょう？　ただ、誰も住んでいないんです。私も、ここ数年あの邸には行っていません」

「それは……もったいないですね。では、中はからっぽですか」

「ええ」

イル様に、私は頷く。イル様は邸を見つめて、

「外見だけは美しい……姫のようですね」

そう、呟いた。

あら、褒められた？　初めてイル様に“綺麗”と言われた？

私は、一瞬そう思った。でも……

「外見……だけは？」

だけ、という言葉に疑問を抱く。

「ええ。外見は美しいのに、中身はからっぽ。まさに、貴女でしょう？」

……はぁぁぁあ？

私は、イル様に本気の殺意が沸くのを感じた。隣では、ナミが懐の小刀に手を伸ばしかけている。

そうよ、ナミ！！　それでさっさとイル様を刺してしまいなさい

！！

「……なんて、冗談ですよ」

イル様は、ふっと笑った。

イル様……私、馬車に乗らなくてもかまいません。歩きます。ですから……、

どうか、貴方の顔が見えない所へ行っても良いですか？

「外見だけは美しい……姫のようですね」（後書き）

イル……またまた爆弾発言を（笑）。

日刊ランキング（恋愛）１９位、ありがとうございます！

そして、お気に入り５０件突破！！

これからも、応援よろしくお願いします！

「歩いても良いからイル様の顔を見たくない！！」

“歩いても良いからイル様の顔を見たくない”
そんなことを思っても、本当に歩くわけにはいかず……。
馬車の中は、重い重い空気。ナミも、私を心配そうに見て、イル様を殺気立った目で見るのを繰り返している。
その状況のまま、数時間が立った。

「……あの、姫様」
「何？」

遠慮がちに、ナミが口を開いた。

「もうそろそろ、今夜の宿に到着するようです」
「ほんと！？　良かったぁ……」

この空間から解放される。そう思うと、自然に笑みが浮かんだ。

「……今の嬉しそうな笑みは、見なかったことにしましょうか」

イル様が、ため息混じりに言った。

「な……。私が、笑ってはいけないのですか？」

むっとして、私は言い返す。私は一言も、“やっとイル様と離れられる”なんて本音は言ってないんだから！

「いいえ。……ただ、貴女の表情は言葉以上に語っていましたよ」

イル様はそう言うと、立ち上がった。
いつの間にか馬車は止まっている。
「では、また明日」
そう頭を下げると、イル様は素早く去って行く。
「……あああっ、嫌な男！！」
私はそう言いながら、拳で馬車のクッションを叩く。
隣で、ナミがこくこくと激しく頷いた。

＊＊＊＊＊

「ひ、ひひひ姫様ぁっ！！」
ナミが、ばん！　とドアを勢いよく開けて入って来た。
「あら、ナミ。どうしたの？　そんなに慌てて」
きょとんとしている私に、ナミは紅い顔で言う。
「ゆ、ユアンが……。来てるんです！！　私、全ッ然気付かなくて！！
姫様、ユアンは来ないって言ったじゃないですか！！　なのに、さっき、外で会って……」
私を責めるような口調……なのに、その顔は真っ赤で、しかも…

…幸せそう。
私は今、ここにユアンがいなくて本当によかったと思った。ユアンがいたら、きっと二人でいちゃいちゃラブラブシーンを初めてしまうだろう。

「ああ……。そう、来てたの……。イル様と同じ馬車ってことに頭がいっぱいで、気が付かなかったわ……。そう、ユアンが……。それはつまり、貴女は……」

私の言葉に、ナミは頷く。

「姫様のお世話が終わりましたら……私、ユアンの部屋へ行ってきますね」

語尾に、音符マークでもついていそうなナミの口調。
私ははぁっとため息をついた。

「ナミ……。ユアンを、ここに連れて来なさい。
私も、ユアンのことは好きだし……って、もちろん、友人としてよ！？　幼馴染としてよっ！？」

“ユアンが好きだし”と言った途端、ナミの髪の毛が逆立ったのを見て、私は慌てて補足する。
ナミは、私のことを一番大切に……お父様やお母様よりも大切に思ってくれているけど、ユアンが絡むと少し別なのよね……。
ユアンが私のことをからかったりすると怒るんだけど、私がユアンのことで今回のような事を口にしたら、ナミは私にも殺気を向ける。

「はぁ……。私は、ユアンのことなんか奪わないわよ」

「ゆ、ユアンは姫様に奪われませんよっ！！　私にめろめろなんですから！　って、きゃあっ、私ったら何を……っ！」

一人で言って、一人で赤くなるナミ。
本当に、めろめろらぶらぶカップルだ。

「じゃあ、ユアンを呼んで来ますね！」

……ユアンを呼びに行かせたのは、間違いだったかもしれない。
足取り軽く……というより、ピンクのオーラ付きで飛んで行ってしまいそうなナミを見て、私はそう思った。

＊＊＊＊＊＊

「おうっ、リイナ！」

ユアンは、部屋に入ってくるなり片手を上げてそう言った。
その途端に飛ぶ、ナミの高速頭はたき。

「ユアン、リイナ様でしょ！！　それか、姫様！　呼び捨てはだめっていつも言ってるでしょ？」
「って、ナミ……」

頭を擦りながら、むくれてナミを見るユアン。
ユアンはさらさらとした金髪に緑の瞳の、容姿端麗な騎士だ。
幼馴染ということもあって、私を呼び捨てでよんでいる唯一の人（お母様とお父様を除いて）。

「いいのよ、ナミ。ユアンに“リイナ様”なんて呼ばれた日には、天と地がひっくりかえっちゃう」
「だろー？　ほら、リイナもこう言ってるじゃん」
「ひ、姫様がそう言うのなら……」

しぶしぶ、といった表情のナミ。
もう頭をはたかれなくなって、ユアンはほっとした表情だ。
ここまでは、いつもの出来事。そして、ここから始まるのは――――

「もう、いつもだめだって言ってるのに……」
「まぁまぁ、リイナも良いって言ってんだからさ、ほら、許してよ、な？」

そう言って、ナミの髪を撫でるユアン。
ナミの頬は、あっという間に真っ赤に染まる。

「……うん」

こくんと頷くナミ。
ナミ……貴女、さっきまであんなに……。

「それよりさ、ナミ、今日の夜、俺の部屋に。夜の１２時でどう？」
「行くわ、ユアン。１２時ね？　きっと行くわ」
「うん、待ってるよ、ナミ」

そして、私の耳に聞こえるちゅっというリップ音。
ユアン……夜に部屋に来てって……私が三人で話したいって言ってたの、忘れたの？

「あのー……ナミ、ユアン……？」
「ナミ……君が馬車に乗るなんて、聞いて無かったよ。俺の馬にいっしょに乗せてあげたかった」
「ユアンと馬に乗れるのは凄く良いけど……私は姫様といっしょにいるんだもの」

二人は私の言葉を無視して、いちゃいちゃシーンを続ける私の侍女と騎士。
王女（わたし）の事を忘れるなぁぁぁあ！！

「歩いても良いからイル様の顔を見たくない！！」（後書き）

あああ、やっぱり題名に良い台詞が見つからなかっ……（ｒｙ。

２００ポイント突破、１００００アクセス突破しました。

ありがとうございます！

「私はイル様に対し今まで一度も、決して、胸をときめかせたことはありません

翌朝……私を起こしたのは、当たり前のようなナミの声。

「ナミ……」

「おはようございます、姫様」

昨日はユアンといちゃいちゃしたせいか、ナミはきらきらとしたオーラを纏っている。

心なしか、肌もつるつるな気がする……。これが、愛の力か……。

「貴女……昨日の夜遅くまで、ユアンの部屋には明かりが灯っていたのに……よく、そんなに元気ね……」

苦笑を浮かべる私に、ナミは顔を紅くして笑う。

なんでかしら……凄く、自分が悲しい……。

「姫様、お食事のご用意は整っています。あと一時間後には出発らしいので、お早く」

「分かったわ」

私は頷いて、ベッドから出る。

またあの馬車旅が始まると思うと、心が重かった。

＊＊＊＊＊＊

「今日は、馬車ではなく馬で参りましょう」
イル様の部下の白い髭の男が、私に茶色い馬を見せながら言った。
「馬で旅を？」
「はい」
私の問いに、白髭が頷く。
「でも……今日も、長いのでしょう？　ずっと馬の上は……」
それに、私は馬に乗るのがあまり得意じゃない。
王女だから乗馬が上手でなくても別に良いけど、イル様にそれを見せるのは嫌だ。
「ですが、もうそろそろ国境を越えます。レフシア王国の一番の名物は“景色”なので、リイナ王女様にも、ぜひご堪能して頂きたいと思いまして。
馬車の窓では、とてもその壮大な景色は充分に味わえませんよ」
白髭は、「ぜひ、ぜひ！」と言い続ける。
「……分かりました。今日は、馬で参りましょう」
私は苦笑して頷いた。
どうか、イル様の前で馬から落ちませんように。

＊＊＊＊＊＊

さて……どうしたものか。
私は、目の前の茶色い馬を見る。王女様って、動物と仲良いイメージが、民にはある……らしい。
でも、私はどっちかというと、好かれもせず嫌われもせず。つまり、乗馬の得意でない私を乗せて、勝手に馬がにこにこと運んでくれるような関係じゃない。

「……姫様、大丈夫ですか？」

ナミが、少し心配そうにみてくる。
そんなナミは、ちゃっかりユアンの馬に乗せてもらってる。二人乗りって、見る側からだとこんなに嫌なのね。
そしてイル様は……黒い馬を見事に乗りこなしている。
乗馬技術は見事。でも……王子なのに、黒い馬ってどうなんだろう。
イル様は何度も言うけど、黒髪に切れ長のブルーの目という外見。美系なことに違いはない。
でも……その色って、悪役の色じゃないかと思う。そりゃあもちろん、私にとっては悪役だけど。

「絶対、王子様って金髪よね……」

私は、ぽつりと呟く。何度も言うが、美系だということは認める。
でも、私の理想は、金髪にブルーの瞳で、切れ長でない瞳の王子。
……イル様を見て、性格を知って、本能的に理想がイル様と反対になったのかもしれないけど。

「何を、言ってるんですか」

隣で、イル様がため息をついた。

「別に。ただ単に、考えことをしていただけです」

「……金髪ですか。外見ばかりに捉われるとは、嘆かわしい」

そう言って、私の嫌いな切れ長の瞳で私を見るイル様。

嘆かわしい？　なんて失礼なことを言うんだ、この王子は。

「金髪、というと、私では御不満ですか？」

「……えっ！？」

イル様の言葉に、私は思わずつんのめった。

お茶を飲んでいたら、間違いなく吹き出していただろう。

「姫……慌てすぎです」

イル様は、ため息をついてそう言う。そしてお決まりの、私を見る醒めた目。

もうその目はやめてほしい。

「だって……不満ってイル様のお顔のことですか？」

私の問いに、イル様はええと頷く。

「別に貴女にどう思われようと良いですが、少し気になったもので」

イル様の言葉に、はぁ……と私は考え込む。

イル様の外見を見て、最初はときめいた。胸がどきどきした。それは確かだ。

でも……それを言うのは、なんか嫌だ。だって、今は嫌いなんだし。

「悪いとは、思いません。でも……別に、好きではありません」

そう言って、馬のスピードを速める。

「ほう……では、あの日貴女の頬が赤く染まったように見えたのは、私の見間違いだったのでしょうかね？」

イル様の言葉に、私は固まった。

「な……それ、は……」

「……リイナ姫？」

イル様は、私をじっと見つめる。確かに、美系だ。

“好きではない”と言ったのは、嘘だ。でも……こんなにかっこいい顔を“好きではない”と言わせるほど、イル様の性格が嫌いなのも確かだ。

「見間違いではありませんか？　私は、今までに一度も決してイル様に対し、胸をときめかせたことはありませんもの」

私はイル様ににっこり笑いかけて、再び馬を進めた。

が――――前に、足場の悪い道があることに気付かず……急に馬の背が揺れ――――

「きゃぁぁっ！！」

イル様の目の前で、無様に馬から落馬した。

「私はイル様に対し今まで一度も、決して、胸をときめかせたことはありません

タイトル長いですね……。

そして、今日からテスト一週間前なので、更新が難しくなります。

御勘弁ください。

「貴女が私に恥をかかせないことを、願っていましょう」

「姫様っ！？」

ナミが、私を見て悲鳴を上げた。

私は地面に座り込んでいた。落馬したと言っても、怪我は無さそうだ。

「リイナ様！」

ユアンが慌てて馬を降りる。人前では、ユアンも“様”付けで呼んでいる。

そして、イル様は———

「貴女は……どうやったら落馬など……」

呆れるのと驚くのとが入り混じった目で私を見てくる。

「ら、落馬したのは初めてですよっ！！　普段はしません！！」

私はユアンに助け起こして貰いながら、イル様に言う。

……嘘だ。私はこれで、たぶん１００回目くらいの落馬。

「姫様、やはり、馬には乗らなかった方が良かったんじゃないですか？」

ナミが心配そうな顔で私に耳打ちした。

「で、でも……今更馬車に乗り替えたら、落馬したから馬をやめ

たみたいじゃない。
イル様になんて言われるか」
私はちらっとイル様を見ながら言う。
イル様は、一応婚約者ではあるので私が馬から落ちた時、助け起こしてくれようとは想ったらしい。馬から降りている。でも、結局助けてくれたのはナミの夫であるユアンだったけど。
「そ、そうですね……。確かに、これ以上イル様に姫様を馬鹿にされるのは私も嫌です」
ナミがちらっとイル様を見て頷いた。
「だ、大丈夫。もう落ちないわ。落ちそうになったら馬にしがみついてやるから！」
「姫様……それはとても画期的な御提案ですが……あの……」
良い提案を思いついて顔を輝かせる私に、ナミは言い辛そうに口ごもる。
急にユアンがナミの横から顔を出して、
「それじゃ、落ちるのと変わらないくらい見苦しいのではありませんか？」
と私に言った。
私はしばらく、馬から落ちまいと必死にしがみつく私を想像する。
うん、あまり良い方法では無いかもしれない。
「……それもそうね。じゃあ、どうすればいいと思う？　ユアン」
「え、俺ですか？　どうすればって……」

突然話を振られ、返答に困るユアン。

「うーん、やっぱり、馬車で行くのが一ば……」

「ユアン、今更馬車に乗るなんて、姫様の恥なの！」

馬車に乗るのが一番、と言いかけたユアンを、ナミがぎろっと睨む。

途端に、ユアンは、はい、と縮こまった。一発で分かる、この夫婦の権力図。

「はぁ、分かった。普通に乗るわ、普通に」

私はそう言うと、再び馬に跨る。

「姫、大丈夫ですか？　あまり馬が得意でないのなら、馬車でも良いですが」

イル様が私にそう訊ねる。私付きの兵士（ユアンとナミを除く）が、『イル陛下はなんてお優しいんだ』と囁いているのが聞こえる。

でも、私にはイル様がそう言って、心の中では馬鹿にしてるのが分かるんだ。

「いえ、大丈夫です。慣れぬ道ですから、たまたま、たまたま落馬してしまっただけですから。どうぞ、馬で進みましょう？」

私は『たまたま』という言葉を強調して、イル様ににっこり微笑んだ。

イル様は頷いて、

「そうですか。……ただ、私は姫には馬車で進んで欲しいのですが」

と言う。あら、心配してくれてる？　もしかして。

そう思ったのは、一瞬だった。

「なぜですか？」

私が聞いた途端、返って来たのは『姫が怪我をしないか心配だからです』……などでは、勿論無く……、

「民の前で、姫が今のような醜態をさらしてしまわれては……貴方は私の婚約者なのですから、貴女の恥は私の恥なのです。

ですから、そのためにも馬車に乗っていただきたいのですが」

そんな答えだった。

ぴき、と頭の中で音が鳴った気がした。隣のナミからは、青い炎。ユアンは顔をきょとんとして急に完全燃焼しだしたナミを見ているのが分かる。

「あら、なぜイル様は私がまた落馬する前提で離しておられるのですか？　もう、二度と、絶対に、落馬などしませんわ」

『イル様の前では』そのセリフは飲み込んだ。

「それは……本当ですが？　失礼ながら、どうもそうとはとても思えないのですが……」

イル様は私をじろじろ見て言う。ご丁寧に、苦笑までしながら。

なぜだろう……最初に会った時より、ずっとずっと嫌な男になっ

てきてる気がするのは、私だけだろうか。

「まぁ、イル様はご自由にご想像なさっていてください。まぁ、その想像はあくまで想像、私は絶対に、イル様に恥をかかせたりいたしません」

『イル様が恥をかく姿は、とても面白そうですけど』そのセリフも、呑み込んだ。

イル様はふっと笑う。……いや、嘲笑に近い笑みを浮かべる。

「それは、道中楽しみですね。貴女が私に恥をかかせないことを、願っていましょう」

「貴女が私に恥をかかせないことを、願っていましょう」（後書き）

テスト前なのに更新しちゃいました……。
いや、もういい、テストなんか！！　テストって何、おいしいの？
　状態に、私はなるんだ！！

さて、テストは置いておいて……
２５０ｐｔ突破、ありがとうございます！！

そして、下手ながら、リイナとイルのイラストを書いてみました。
活動報告ではもう発表したのですが、こちらではまだ書いていなかったので（＾＿＾；）

イメージが壊れても良い、という方のみ、ご覧下さい。↑

　ｈｔｔｐ：／／４２３３．ｍｉｔｅｍｉｎ．ｎｅｔ／ｉ３３４９２／

「私がどんなに貴女を嫌おうと、貴女が婚約者であるという事実は、変わらない

あの後も馬で進んだ私は、幸い落馬せずに済んだ。
今夜の宿である、レフシア国の貴族の館についた途端に安堵のため息を漏らしたのは、私とナミしか知らないけど。

「姫様、とうとう明日は王城へのご到着ですね」

部屋に入ると、ナミが言った。私はため息をつきながら頷く。

「あのイル様のお父様とお母様……どんな人なのかしら、気が重いわ」

ため息をついて言う私に、ナミはこくこくと頷く。

「ええ、一体どうしたらあんな無礼な王子様が生まれ……失礼しました」

思わず本音を言いそうになったナミは、慌てて口を閉じる。どんなに不快感を抱いていても、国王に対してこんなことを言ったら大変だ。
でも、私もナミに同意せずにはいられない。

「そうよね、まったく。本当にどんな育て方をしたのかしら……」

私はそう呟いて、ベッドに突っ伏した。
イル様が見たら眉をひそめるだろうけど、構わない。今はいないし。

「姫様、イル様との旅は、さぞ疲れたでしょう……」
「そうね……。何か、飲み物を持って来てくれる？」
「はい」

ナミは頷いて、部屋から出て行った。

「はぁ……どんな人なんだろう」

ごろんと寝転がり、天井を見つめる。
イル様のお父様とお母様までイル様みたいだったら……だめ、今度は殴るんじゃなくて蹴りをいれてしまうかもしれない。

「もう、だめ、お母様にも言われたじゃない、リイナ」

そう自分自身に言い聞かせていると、パリン！　と窓の割れる音がした。

「……へ？」

子供がボールで遊んでいて、窓に当てでもしたのかしら。
そう思った私は、窓の方を見て目を丸くした。

「……誰？」

入って来たのは、大柄な男。
思わず誰？　なんて聞いたけど、これは私でも分かる。賊か、刺客。全身黒い服で、顔まで黒い布で隠している。

「あんた、ルーン王国のリイナ・レンスリットだな？　レンスリ

ット王家の第一王女、そしてこの国の第一王子であるイル・アヴィンセルの婚約者」
「え、はい……」
男の問いに、思わず私は答える。
「そうか……あんたがリイナ王女か……」
男はそう呟くと、すらっとした大きな刀を構えた。
「な……」
私は慌てて、近くにある護身用の小刀を手に取った。
これで敵うか分からないけど、とりあえず構えて男を睨む。
「はっ、それで対抗する気かよ、温室育ちの王女サマが」
男はふっと鼻で笑う。
こんな状況にも関わらず、むかっとした。
「は、鼻で笑わないで！　失礼よ、貴方！　私、これでもユアンから護身については一通りならってるんだから！　痛い目を見たくなかったら、すぐにその刀を下ろしてさっさと私の前から消えなさい！」
「ああ？　俺は刺客、殺しのプロだ。少し習っただけの王女様になんか、負けるはずねぇだろ。
いいか、俺らはな、お前に……ルーン王国とレフシア王国に強い繋がりが出来たら困るんだ。だから、婚約者……最大の掛け橋であるお前には、死んでもらわなにゃんねぇんだよ、王女サマ！」

そう言って、男がにやぁっと笑う。
でも、そんな理由で殺されるなんて気に食わない。だって、私はイル様のことが嫌いなのに結婚するのよ？

「あのねぇ、人の勝手な理由で殺さないでくれる？」

私は声にいらだちを滲ませながら、男に言う。

「良い？　私は、イル様と結婚なんか、絶対にしたくないのよ！
貴方は私とイル様の結婚に反対しているようだから言うけどね、私はイル様が大っ嫌いなの！
あんな最低な男、今まで一度も見たことがないわ！　いちいち勘に触ることは言うし、結婚なんて願い下げ。
結婚せずにいられるならそうしたいわ！」

言っているうちにどんどんヒートアップしてきて、言い終わったときには私はぜいぜいと荒い息をしていた。
男は、ぽかんとしている。

「そんなにイル王子を嫌う奴、初めて見たぜ……」

呆然と呟く男。ええ、そうでしょうね。イル様は、傍から見たらただのかっこいい王子様だもの。

「あんた……大変なんだな」

男の目が、哀れな者をみる目になってるのは気のせいかしら。
刺客に同情される王女（私）ってどうなのかしらと思いながら、私は頷く。

「でしょう？　だから、婚約なんて破棄出来るならとっくにしてるわ！」
「そうか……でも、あんたが嫌いだろうと結婚することに変わりはねぇだろ？　ってことで、死んでくれや」
男はそう言うと、だっと私に向かってきた。
ちょっと待ってよ！　私の魂の叫びはどうなったの！？　嫌いな人との婚約が原因で死ぬって、そんなの嫌よ！？
「っ！」
小刀で、刃を受け止める。が、小刀はすぐに弾き飛ばされた。
「ほーら、あんたの考えは甘いだろ？　王女サマ」
男はにやぁっと笑って、刀を大きく振り上げる。
終わりだ……そう思って、目をつむる。攻撃は———来ない。……って、え？
まさか、ここでイル様が来て剣で刀を受け止めてくれている、なんてベタな展開が……
「あ、イル様……」
あった。
目の前には、剣で男の刀を受け止めているイル様の姿。
「なぜ……え？」
ぽかんとしている私を見て、イル様が言う。

「なぜも何もないでしょう。私が貴女を助けるのは、当然です。私がどんなに貴女を嫌おうと、貴女が婚約者であるという事実は、変わらないのですから」

「私がどんなに貴女を嫌おうと、貴女が婚約者であるという事実は、変わらない

テスト後初更新！！
タイトルが、長い……↑

そして、ものすごーくベタな展開ですが……二人はこれくらいのことでくっつかないので、ご安心ください。↑

そして！　月潟隼様より、リイナのイラストを頂きました！
ｈｔｔｐ：／／４２３３．ｍｉｔｅｍｉｎ．ｎｅｔ／ｉ３３６５４／

感激です！！　活動報告では１０月に書いていたのですが、こちらを更新していなかったので、ご紹介が遅れて申し訳ありません（＜　＞）

私より遥かに上手いです！
一目見ることをおすすめしますっ！

「私は“婚約者”として姫を助けただけだ。好意など欠片もない」

「イル様……」

まさか、こんなに“婚約者”らしいことをしてくれるなんて……。

一瞬、そう思った。でも、

「嫌いだとしても？　イル様、それは今必要ないんじゃないですか？」

イル様の言った“嫌い”という単語が引っかかる。イル様が私を嫌いだってことはもちろん知ってるけど、今言わなくても良いじゃない。

傍目から見たら、完璧な名シーンなのに。

「私は嘘をつく男ではないので。助けたので別に良いでしょう？」

「た、助けてもらえたのはありがたい……ですけど！　でも、ここはやっぱり名シーンにしなければ皆の期待が……ッ！」

「誰が期待しているのですか。ここには私と貴女とこの刺客しかいないのですよ」

「そ、そうですけど……」

刺客は、そんなやりとりをしている私とイル様をぽかんと見つめる。

「あんたら……あれなのか、喧嘩するほど仲が良いっていう……そうだ、痴話喧嘩！！」

「……はい？」

なんで急に“痴話喧嘩”って言ったのか、というより、どうしてその結論に至ったのか分からない。
でも、一つだけ分かったこと。
私とイル様の考えが、初めて一致したってこと。この刺客に対して。

「……お前には首謀者を聞こうと思って生かしておくつもりだったが……」

イル様は目を肉食獣のように光らせ、剣を振る。刺客の刀が、いとも簡単に吹っ飛んだ。
刺客の首元に、剣の刃が当てられる。

「私と姫の間のことを“仲が良い”というとは……なんたる侮辱。死罪だ」
「……は!? なんで!? ちょ、王子サマ!?」

イル様の言葉に、刺客は慌てる。

「だって、あんたら婚約者だろ!? そこの王女サマがさっき王子サマのことを“嫌いだ”って言ってたけど、やっぱあれ違うだろ? 俺、なんかおかしいこと言ったか!?」

おろおろと言う刺客。
だめ……それ以上言ったら、私がキレる。

「ねぇ……どこを、どう見たら、私達が仲良く見えるの?
イル様と仲良いように見られるなんて、こんな侮辱は無いわ!
私は、こんな最低な人とは仲良くならないの! 貴方は目がおかし

いの？　それとも頭？」
「は！？　ちょっと、王女サマ！？」
ゆらり、と私は刺客に近づく。
「姫、こいつをどうしましょうか。先程“死罪”と言いましたが……それでは、足りぬ気がします」
イル様が私に訊ねる。私も、死罪じゃ足りないと思う。
「イル様は、どうしたいとお思いですか？　私は、こんなに不快にさせられたのでこの刺客にも同じような思いをさせたいと思うのですが」
「それは名案ですね。では、死よりも惨いものを教えてやりましょう」
イル様はふっと笑って頷く。
その時、扉が開いてナミが入って来た。
「姫様、お茶をお持ちしました……って、えぇぇっ！？　イル様！？　どうしてここに！？　姫様のせっかくのイル様といないお時間を……じゃない、姫様の一人のお時間を邪魔するおつもりですか！？」
ナミは首元に刃を当てられている刺客に気付かないようだ。
というより、イル様がいるってことでいっぱいいっぱいなのかもしれないけど。
「姫様、イル様は何の御用が……って、この男性はどなたですか！？」

私の傍まで来て、やっと刺客の存在に気付く。

「刺客だ。私が姫を助けたが、何か文句が？」

イル様がナミを軽く睨んで言う。

ナミは刺客とイル様、そして私を順番に見つめる。そして、

「い、イル様が姫様を助けた！？　信じられません！」

そう叫んだ。イル様は、は？　と聞き返す。

「だから、イル様が姫様を助けたなんて信じられません！　イル様が、そんな良いことを行う……いえ、違います、あの、だから……とにかく信じられません！」

途中、とてつもなく失礼な事を言いかけたナミ。

私はため息をついて言う。

「ナミ……。信じられない気持は分かるけど、本当にイル様が助けてくれたのよ。今回ばかりは、お礼を言わなきゃならないわ」

私の言葉に、ナミもやっと納得したようだ。

「姫様が言うなら……イル様、このたびは姫様を助けて頂き、ありがとうございます」

そう言って、イル様に頭を下げる。

「私は“婚約者”として、姫を助けただけだ。決して、姫に好意

を抱いたわけではない。
好意など、欠片もない。それを忘れないでくれ」
イル様はナミにそう言うと、部屋を出て行った。
刺客は、いつの間にか縄で縛られている。
「助けて頂いたのはとてもありがたいですが……やはり、失礼ですね！！
好意など欠片もないだなんて、失礼にもほどがあります」
ナミはイル様の出て行ったドアを睨みつけながら言う。
「……ねぇ、ナミ」
私は縛られている刺客を見つめて呟いた。
「私ね、この刺客に凄く侮辱されたの。イル様と“仲が良い”って。
こんなこと言われたなんて、耐えられない。不快で不快でしょうがないの。だから……ナミ、貴女の思いつく限りの方法で、この刺客を死よりも惨いことにしてあげてくれないかしら」
「姫様とイル様が“仲が良い”と言った？　信じられないくらい失礼なことですね。
分かりました。私に、お任せ下さい」
ナミはそう言って、にやっと笑った。
それは、私にとっては天使の微笑み、刺客にとっては悪魔の微笑みだった。

「私は“婚約者”として姫を助けただけだ。好意など欠片もない」（後書き）

今回は、けっこう早めに更新出来ました！

次は、とうとうレフシア王国の王城に到着……予定です。

「さぁ……行きましょうか、ナミ」

「ねぇナミ、あの刺客はどうなったの？」

翌日の朝、部屋でナミにあの刺客のことを聞いた。

「ちゃんと、始末致しました！　きっと、あの男はもう二度と人と会えませんよ」

ナミは誇らしげにそう答える。

「へぇ……具体的に、どうしたの？」

私のその問いに、おろおろと慌てだす。

「そっ、それは……あの、ええ、まぁ……あのですね……これを教えてしまったら、姫様の純なお心が無くなってしまうと言うか、こんなことをしたなんて知られたら、ユアンと離縁することになってしまうそうというか……」

そう、もごもごと言う。

一体どんなことをしたんだろうと、冷や汗が流れる。でも、やっぱり気になる。

純な心なんて、イル様と出逢った瞬間から消えた……と思う。

「ねっ、ナミ、教えて！　お願い！」

何度も頼む私に、ナミはしぶしぶといったようすで口を開く。

「では……あの男をですね、まずは大衆の面前にさらしたんです。そして、ピ――――をピ――――しまして、そしたら男がピ――――と叫ぶものですから、ピ――――をして黙らせまして、結果的にピ――――になったんです」

こそこそっと、その内容について私に耳打ちするナミ。

「……貴女……女を……いえ、人間を捨てたのね……」

全てを聞き終わった私は、少し涙の滲む瞳でナミを見つめた。

「姫様の為です。女だということも、人間だということも、哺乳類であるということも捨ててやります」

ナミはそう言って、私に微笑む。

あんなことを喋った後でなぜ微笑むことが出来るのかが不思議だけど、このナミの言葉には感動した。

「ナミ……ッ！　貴女はやっぱり最高よ！」

「姫様ッ！」

そう言って、私達は固く抱き合う。

その時、こんこんと壁を叩く音がした。

「リイナー……ナミに手出すなよ？」

「へっ？」

声をする方を向くと、そこにはユアン。周りに誰もいないから、“リイナ”と呼んでる。

「ユアン。私は女よ？　ナミに手出すわけないでしょ」

苦笑交じりで言う私を見て、

「いやー、分かんない。だってナミはめちゃくちゃ可愛いし、良い人だし、最高だし」

とユアンは言う。

まったく、惚気て……。ナミは、ユアンの言葉に頬を真っ赤に染めてるし。

「あのね……私は女！　ナミも女！　私にはそっちの趣味はないの！」

「へぇ、初めて知った」

ユアンはひゅぅっと口笛を吹く。

ああもう……！　ユアンは、本当に人前とそうでないときでは態度が違う。

「ユアン、それは姫様に失礼すぎでしょ！」

ナミがそう言って、ユアンの頭を叩く。

ぱこん、などという可愛いものじゃない。あえて効果音をつけるなら……バガァン？

「って、ちょ、ナミ、痛……」

「姫様に失礼なこと言うからよ。ほら、謝んなさい。謝んないと……」

ナミはそう言って、何かをユアンの耳に囁く。
ユアンの顔が真っ青になった。そして、

「ごめん！　いえ、すいません、ごめんなさい！」

と、土下座までして私に謝る。
本当に、この夫婦の関係ってなんなんだろう。

＊＊＊＊＊＊＊

今日は、初日と同じ馬で行くことになっていた。
正直、一安心。イル様といっしょに狭い空間にいるのは嫌だけど。
だから、

「ここからは、もう近いらしいです。3時間ほどで王城につくそうですよ」

というナミの言葉は嬉しい。
そしてその通りに、すぐに王都が見えてきた。
灰色の壁に囲まれた、城郭都市だ。

「ここが、王都……」

窓の外を見つめて、私は呟く。
やっと、到着した。これで……やっと、やっと……この、いらいらする、不快な、イル様との旅が終わるっ！！

「姫様！？　なぜ泣いておられるんですか！？」

ナミが驚いて私を見る。ふと気付くと私は涙をぼろぼろと流していた。
だって、嬉しいんだもの。イル様との旅から解放されるということが。

「だって……何度このたびの途中にイル様に殺意が沸きあがって、それを何度抑えたことか……！
それからやっと解放されるのよ？　もう嬉しくて嬉しくて……」
「姫様、そんなにも……ッ！」

ナミも貰い泣きをし始めた。
二人して泣く私達。そんな私達を見てイル様は苦笑……していない。さっさと先を歩いている。
本当に、薄情な婚約者だ。

「さぁ……行きましょうか、ナミ」
「はい、姫様」

私は深く息を吐いて王城を見つめると、足を踏み出した。
これから会うのは、イル様の血縁だ。一体、どんな敵(家族)が待っているのだろうか――――――。

「さぁ……行きましょうか、ナミ」（後書き）

今回、あんまりお話が進んでないですね……。
でも、次話は新キャラ登場！！　です。十中八九。

そして、３００ｐｔ突破！！
ありがとうございますっ！！　３００ｐｔ……初めて、３の後に０が二つ……ッ！（感涙）

……ナミが刺客に何をしたかは、トップシークレットでおねがいします。
彼女の名誉にかかわりますので。↑

そして、今日は予約投稿です。
さて、今の時間（昼の十二時）、私はベッドから出ているのでしょうか。↑

「びっくりして固まる姿は、とても可愛くいらっしゃいましたよ」

「よく来て下さった、リイナ殿！」

大広間で、玉座に座ったレフシア国王が豪快な声で言った。

「こちらこそ、お招きいただき光栄です」

私は膝を折って、にこっと微笑む。

国王はがははははと笑った。

「いやいや、やはり美人と名高いリイナ王女の微笑みは、目に良いですなぁ。

イルではなく、わしが惚れてしまう」

「まぁ、そんな……お上手ですね」

私はまだがははと笑っている国王に苦笑する。

イル様のお父様だから、大理石みたいな堅物だと思っていたけど……なんだろう、この、イル様との差は。イル様よりずっとテンションが高くて、明るい人じゃない。

一体どうしたら、この国王陛下からイル様が生まれるんだろう……。それとも、お妃さまがイル様似の方なのかしら。

「父上……御冗談はおやめください。母上がいるのですよ」

イル様はため息交じりにそう言った。

国王陛下と会った途端に、イル様の顔に浮かんだ疲れの色。

「知っとるわい。どうだリイナ殿、わしの妻もかなりの美人だろう」

国王陛下がそう言うのと同時に、お妃様が大広間に入って来た。イル様と同じ、漆黒の髪。確かに、美人。でも……なぜ、黄色(バナナ)&ピンク(ストロベリー)の色合いのドレスを来ているんだろう……。漆黒の髪に似合わない。

残念すぎる。

「あら、リイナ様。ルーン王国から、よく来てくれましたね」

「お招き頂き光栄です、お妃様」

お妃さまは私ににっこりと微笑んで、国王の隣にくる。

すっごく美人。美人の微笑みは、凄く綺麗。とても綺麗、なんだけど……。やっぱり、一番気になるのは……。

黄色(バナナ)&ピンク(ストロベリー)、黄色(バナナ)&ピンク(ストロベリー)、黄色(バナナ)&ピンク(ストロベリー)、黄色(バナナ)&ピンク(ストロベリー)……。

「今宵は、歓迎の宴と致しましょう。リイナ様は、イルの婚約者ですものね。

リイナ様、何かお好きな食べ物はありますか？　出来るだけ用意させますが」

「バナナ&ストロ……あっ、いえ、別に何もございません。何でも好きです」

“バナナ&ストロベリー”と言いそうになった私は、慌てて言いかえる。危ない危ない。

「そうですか？　では、こちらの侍女がお部屋まで案内致します。リイナ様の侍女の方……ナミさん？　ナミさんにも、お部屋をご

用意しています。
ここではナミさんも大切なお客様、ごゆるりとおくつろぎください」
お妃様がそう言うと、二人の侍女が入って来た。
「リイナ様、ナミ様、案内致します」
「え、あの、私は姫様のお世話を……」
ナミがおろおろと私を見る。
「いいえ。ナミさんもお客様です。この城ではどうか、おくつろぎくださいませ」
お妃様はにこにこしてそう言っている。
そんなにもにこにこしてると、反対に怖い。
「ナミ、ここでは貴女もくつろぎなさい。ただ……時々、話し相手になってね」
私のその言葉に、ナミは『はい……』と頷いた。しぶしぶに見えたけど……私は、見逃さなかった。
侍女に『騎士のユアンと同じ部屋にしてもらえないでしょうか？』と言うのを。

＊＊＊＊＊＊＊

「わあ、綺麗なお部屋ですね……」

侍女に案内された部屋は、清潔感のある上品な部屋だった。
寝ることが好きな私にとっては、人が三人は寝れるであろう大きなベッドが嬉しい。

「リイナ王女様は、イル様の大切な許婚ですもの。私達侍女一同、心こめてお部屋を整えさせていただきましたわ」

にこにこと、花でも飛びそうな勢いで言う侍女。
この人は、私とイル様の間の険悪なムードを知らないから言えるんだろう。

「そうですか……。ありがとうございます」

引き攣った笑みを浮かべて、私は礼を言う。

「では、私はここで失礼させて頂きますね。何か御用の際は、なんなりと私にお申し付けください」

侍女はそう言って、部屋を出て行った。
なんなんだろう……この、ピンクオーラの濃さは。
私はため息をついて、大きなベッドに寝っ転がる。その時、

「リイナ・レンスリット様？　入っても良いですか？」

という、男の声がした。
イル様の声では無い。第一、イル様なら無断で入ってくるだろう。
『貴女は王女なのにベッドにだらしなく寝転がるなんて……』とかなんとか言いながら。

「は、はい、どうぞ」

私は慌ててベッドから起き上がると、少し皺のついたドレスを伸ばす。

ドアが開いて、入って来たのは……、

「お初にお目にかかります、リイナ姫」

金髪……というより、クリーム色？　っぽい髪の毛で、黄緑の瞳の青年。

長身なわりには華奢な体つき。でも……イル様とは違って、優男って感じだ。

「どなた、ですか？」

私の問いに、青年はこつこつと歩いてくる。

そして、私の手を取ってキスしてから言った。

「レフシア王国第二王子、アルヴィン・アヴィンセルです。以後、お見知り置きを」

……イル様には、弟がいたのか。

最初の感想はそれだった。次に、変な名前だなぁと失礼なことを思う。イル様より、“王子”っぽい外見だなぁとも思う。そして――――、

「い、今、キスしました？」

アルヴィン様の手にある自分の手を見つめて、私は訊ねる。

「ええ。こんなもの、挨拶でしょう？」

アルヴィン様はにっこりと微笑んで答える。

微笑んでいるのに……どこか、下町で娘をナンパしているような雰囲気を感じる。

「もしや、リイナ姫はあまりなれてはいませんでしたか？　これは、とんだご無礼を。

しかし……びっくりして固まる姿は、とても可愛くいらっしゃいましたよ」

アルヴィン様はそう笑って、私の頬を撫でる。ぞわっと背筋に寒気が走った。

ここは……この家族は、どうなってるの――――――――――――！！

「びっくりして固まる姿は、とても可愛くいらっしゃいましたよ」（後書き）

新キャラ、第二王子のアルヴィン登場です。
彼は十七歳。最初は「アル」の予定だったんですが……やめました。
２５０００アクセス突破、ありがとうございます！

「“立てば芍薬、座れば牡丹、動く姿はラフレシア”だな」

アルヴィン様はなんのつもりか、そのまま私のベッドに座る。

「ルーン王国のリイナ姫は美しい王女だ、って聞いてたけど、本当ですね。

流れるような金髪、麗しい瞳、透けるように広い肌、ピンクの唇。

嗚呼……美しい」

そう言って、私を見つめるアルヴィン様。

い、い、い……いやーっ！！　気持ち悪い、変態、女たらし！

そんな言葉が、私の頭の中でぐるぐるする。

でも、いくら変態で気持ち悪くて女たらしっぽくても一国の王子だからそんなことを言うわけにはいかず……。

「そ、そうですか？　お褒めに頂き光栄ですわ、アルヴィン様」

そう言って、私は引き攣った笑みを浮かべる。

でも、アルヴィン様は眉をひそめた。

「リイナ姫、そのような無理な笑みは麗しい貴女には似合いませんよ。

さぁ、心の奥からの美しい微笑みを、さぁ、そのお顔に」

そう言って、真っ赤な薔薇を差し出すアルヴィン様。

この方は、本当にイル様の弟君なのだろうか……。

「あのお妃様に、国王様。そしてこのアルヴィン様……どんな遺伝子をしているのかしら」

私は思わず、そう呟く。
もしかして、イル様は本当の王子ではないという展開！？　それが公になったら、きっと私は結婚せずに済んで……。

「リイナ姫、可愛らしいお顔で何を考えているのですか？」

私の考えを中断したのは、アルヴィン様の気持ち悪い台詞。

「あ、いえ、別に……。何でもありません」

そう言って、私はにっこりと微笑む。
考え直してみれば、そんなことはないだろう。アルヴィン様のキャラにあまりにも驚きすぎて、頭がどうかしていたのかもしれない。

「そうですか。それにしても――――」

アルヴィン様はそう呟いて、私を見つめる。

「兄上はリイナ姫について、『“立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花”ならぬ、“立てば芍薬、座れば牡丹、動く姿はラフレシア”だな』と言っていたのですが……」

はい？　アルヴィン様の言葉に、私は固まった。
立てば芍薬座れば牡丹。ここまでは、嬉しい。でも……動く姿はラフレシア？
怒りでふるふる震える身体。ここにイル様がいなくて、本当に良かった。

「私は、まったくそうは思いません。貴女の魅力は、どんなに美

しい花よりも更に美しい。
世界一の庭師が育てた花も、貴女の前では霞むでしょう」
そう言って、“めろめろ”という言葉がピッタリな瞳で私を見つめる。
ああ……誰か、この変態王子をどうにかしてーっ！！

「アルヴィン」

私の心の叫びが届いたのかどうなのか、その時ドアが開いた。
助かった、と思い、私はドアを見る。でも、そこにいたのは――――、

「イル様！？」
「兄上！！」

イル様。なんで、来たのがこの人なの！！
私は心の中でそう叫ぶ。ナミが来てくれたら良かったのに……。

「兄上、どうしてここへ？」
「どうしても何も……。お前が姫の部屋へ行ったと聞いたからな。お前のことだ、ふざけた言葉をずっと並べていたんだろう」
「ふざけた言葉、とは、心外ですね」

そんな会話を続ける、兄弟(敵)。
今の状況は最悪だ。部屋にいるのは、私とイル様とアルヴィン様だけ。まさに地獄。

「あの、イル様、アルヴィン様。失礼を存じて申し上げますが、もうそろそろ出て行ってもらえませんか。休みたいので」

『精神的に』という台詞は、呑み込んだ。
二人は一斉に私を見る。
「そうですね。私は、別に姫と同じ部屋にいる理由はありませんし。アルヴィンを探しに来ただけなので、これで失礼」
イル様はそう言うと、アルヴィン様の首根っこをむんずと掴む。
そして、ドアに向かってずるずると引きずって行く。
「ちょっ、兄上！！　やめてください、私はまだリイナ姫を口説いていて……」
「アルヴィン、なぜお前が私の婚約者を口説く。お前の婚約者は別の姫だろう」
「だって、あの姫は可愛くないし、美しくもないんです。私は、リイナ姫のような姫が妻に欲しいんです」
「あの姫は、見かけ騙しだ。見かけだけで判断していると酷いことになるぞ。私がどれだけ恥をかかせれたか」
「兄上は硬すぎるんです。私は、少しくらい抜けている女性が良いですよ」
「あれは少し抜けているのではない。寧ろ、全てが抜けているんだ。抜けているから作られているというのが等しい」
「兄上、言葉がおかしくなっています」
ひっぱられながらも反論するアルヴィン様と、それを私に対してかなり失礼な言葉で返すイル様。
本当に、この兄弟は最悪だ。
「ああ、そうだ、姫」

イル様がふと思い出したように振り返る。

「今宵は貴女の歓迎の宴のようです。後でこちらの侍女が参ります」

そして、こう付けくわえた。

「何度も言いますが、どうか、私に恥をかかせないでください。この国の上流貴族や、異国からの賓客までお越し下さるのですから」

「“立てば芍薬、座れば牡丹、動く姿はラフレシア”だな」（後書き）

変態王子、アルヴィン、ついにその本性を現しました↑

彼は、外見はイル同様良いのですが……中身の気持ち悪さというか、くささが、それを台無しにしてますね。↑

「shall we dance? リイナ姫」

「姫様！」

ドレスを着替えていたら、ナミがばたばたと入って来た。
私が宴の為のドレスに着替えているのと同じように、ナミもいつもの侍女の服ではなく、貴族階級のドレスを着ていた。

「あの、私、こんな、このドレス！　私はただ、姫様のお世話をすれば、それでいいんですけど……ッ！」

おろおろと、自分の桃色のドレスを触るナミ。
髪型はいつも通りのポニーテールだけど、とても可愛い。

「大丈夫よ、似合ってるから。貴女も、今日くらいは仕事を忘れたら？」
「ひ、姫様！　でも、やっぱり私はこういう席は……」
「ユアンと、宴を楽しみなさい」
「はい、姫様！」
「……」

ユアンと楽しみなさい、と言った瞬間の、即答。
ナミらしいけど、素直で良いとは思うけど、少し呆れてしまう。
もっとも、ユアンユアンって言ってなきゃ、ナミじゃないけどね。

「姫様は、今日もとても綺麗ですよ。賓客の皆様が、絶対驚きます！」

ナミは、白いドレスの私を見て、にっこりして言う。

「ありがとう。……そういえば、ナミ、あのね、話したいことがあるんだけど……」
「はい？　何ですか？」

きょとんとしたナミに、私はアルヴィン様のことを話した。
味方は、増やしていた方が良い。ナミは思った通り、話を聞くと顔を真っ赤にして怒った。

「なんですか、それは！　確かに姫様は美しいですが、その言い方、アルヴィン様は変態じゃないですか！　姫様に対して、イル様の弟の分際で口説くだなんて！」
「本当に気持ち悪いの。しかもね、イル様が私の事を“立てば芍薬座れば牡丹、動く姿はラフレシア”って言ったんだって」

私のこの言葉に、ナミの怒りはヒートアップする。

「何ですってっ！？　イル様……これは、許せません！　私、今からユアンに一番切れ味の良い剣を借りて、それでイル様の首を……ッ！！」
「うんうん、そうそう。そしてそれを１００に切り刻んで海に捨ててその海を燃やし尽くして！」
「はい、姫様！　では、さっそく剣を借りて来ますね！」
「そうよ、早くいってらっしゃい！　……って、だめだめだめぇっ！　私その気満々だっだけど、そんなことしたらナミが殺されちゃう！」
「いいえ、構いません。姫様の為なら、そしてイル様を殺すためならこの命、喜んで差し出します！」
「ナミ……」

私は涙を滲ませ、ナミの手を握る。
こんなに良い侍女、他にいない。でも、
「……あのな、ナミ、俺は剣を貸さないぞ？」
ふいにドアの方からそんな声がした。声の主は、ユアン。
少し呆れた顔で、私とナミを見てる。
「な、なんでよ、ユアン。姫様のためなのよ？　ユアンだって、大切な姫様がこんな目にあってるだなんて、許せないでしょ？」
ナミはそう言いながら、ユアンに向かってずかずか歩く。
「そりゃあ、アルヴィン陛下は気持ち悪いと思うけどさ……ナミ、お前がそれやったら、大問題だから」
何気に、アルヴィン様のことを“気持ち悪い”と言うユアン。
ユアンもユアンで、これがしられたら大問題だ。
「姫様の為なの！」
「だめだ。お前が捕まったら、俺はどうしたら良い？　ナミ、なぁ、お願いだ。そんなことやめてくれ。俺は、お前と絶対に離れたくない」
「ユアン……」
「ナミ……」
……って、待ってよ。待って。
なんで、いつの間にか二人の間にラブラブシチュエーションが誕生してるの！！

「……はぁ」

私がピンクオーラに包まれている二人を見てため息をついた時、宴を告げる鐘が鳴った。

＊＊＊＊＊＊

「あら、あれがルーン王国のリイナ王女？」
「噂通り、美しい」
「ほう……あのように美しい王女がこの世にいるとは」

そんな声が聞こえる中、私は大広間の大階段をゆっくり下りる。綺麗なカーブの階段は、装飾も細やかでとても美しい。
でも……私は、コケないように、という心配でいっぱいだ。だって、今来ている夜会用のドレスはとても裾が長い。今にも踏みそうだ。

「姫、お手を」

イル様が、階段の一番下で微笑んでいる。もちろん、“演技”だけど。
手を出してエスコートしてくれそうなのも、国民への顔向けの為。だから、私も『結構です』と断るわけにはいかない。

「ありがとうございます、イルさ――――」

にこ、と微笑んで、手を伸ばす。その時……恐れていたことが起きた。

つまり……ドレスの裾を踏んでしまった。
ぐらり、と大きく傾く身体。

「きゃぁっ！」

ぐるんと視界が回転して、私は前に大きく倒れ込む。
でも……床に転んだ衝撃は、感じなかった。

「……あ」

イル様が、私を抱えている。
状態は、いわゆる“お姫様抱っこ”。周りの人が、ほう……と声を漏らす。
助けてくれたのは、嬉しい。
でも……イル様にお姫様抱っこをされるなんて……嫌！　でも、

「あ、ありがとうございます、イル様」

これは言わなければいけない。
イル様はそれを聞くと、にこりともせずに私を下ろした。

「次から、気を付けてください」

そう言う。あら、今回はいらいらすることを言わないんだ。
そんな期待を持った。なのに……、

「貴女は、何度転べば気が済むんですか」

そう、他の人には聞こえないように囁く。

「な……ッ」

顔を真っ赤にして、私はイル様を睨んだ。
イル様は、涼しげな顔。本当に、嫌な男。助けてもらった恩なんて、光の速さで私の頭の中から消えた。
どう返してやろうか悩んでいたところ、

「リイナ姫、兄上、ここにいましたか」

そんな、変態（アルヴィン）の声がした。

「アルヴィン様。どうも」

にこっと微笑んで、頭を下げる。
顔が引きつっていないか心配だ。

「おお、これはこれは。夜会の時は、また一段と美しい。
貴女が動くと、まるで世界一の宝石に命が吹き込まれたようです」

アルヴィン様は、そう言って私に微笑む。
嗚呼……気持ち悪い！
私は、心の中でそう叫ぶ。でも、アルヴィン様は私の心の叫びに気付くはずも無い。

「ところでリイナ姫、この後ダンスがあるのですが……」

微笑んだまま、そう言い始める。
んん？　と悪い予感がした。
そして――――アルヴィン様は、ふわっと私に手を差し出した。

「shall（シャル） we（ウィー） dance（ダンス）？　リイナ姫」

「ｓｈａｌｌ　ｗｅ　ｄｏｎｃｅ？　リイナ姫」（後書き）

アルヴィン、ああ、書くたびに変態になる……↑
……というより、イルとリイナ、もう１５話目なのに全然進展がありません……↑

そして、この世界での言葉について。
リイナの国、ルーン王国とイルの国、レフシア王国。そしてその近隣国は“日本語”を話します。
「ｓｈａｌｌ　ｗｅ　ｄｏｎｃｅ」のような英語は、海の向こうの国で使われている……この地球でいう、“英語”です。
リイナ達は日本語を喋っていますが、国の状勢的にはヨーロッパです。
分かりにくくてすいません。

３００００アクセス突破、ありがとうございます。

「姫は一度、ダンスを習われては？」

「ｓｈａｌｌ　ｗｅ　ｄｏｎｃｅ？　リイナ姫」

そう言って、私に手を差し出すアルヴィン様。

にっこりと、さわやかな笑顔。周りからは、きゃぁっという黄色い悲鳴。

私も、ここだけだったら“かっこいい”と思っただろう。でも……私は、変態のアルヴィン様を知っている。

といっても、一国の王女が王子の誘いを断るわけにもいかない。

「喜んで、アルヴィン王子」

私は微笑んで、アルヴィン様の手を取る。

オーケストラが、ゆったりとした曲を奏で始めた。

「姫は、社交ダンスはお上手ですか？」

アルヴィン様が、私の腰に手を回しながら言った。

「え、ええ。ルーンでもよく夜会は開かれますもの。王女ですから、嗜んでいますわ」

私はにっこりとそう答える。

嗜んでいる、というのは本当だ。でも、私が相手の足を踏むのが得意、とまでは、いう必要が無い。

「そうですか。では」

そう言って、ステップを踏み始めるアルヴィン様。
ワン、トゥ、ワン、トゥ……。頭の中で、リズムを取る。
「良い調子ですよ、リイナ姫。……ぐぎゃ……っ」
にっこりと微笑みかけていたアルヴィン様の顔が、苦痛で歪んだ。
私の足の下に、アルヴィン様の足を感じる。
「きゃ……す、すいませんアルヴィン様！」
私はおろおろと囁く。その間も、私たちはダンスを続けたまま。
「いいえ、これくらいぃぃぃ……ッ！」
答えながらも、また苦痛の表情。
「も、申し訳ありません！　今すぐダンスを中断して……」
「いいえ、ダンスは中断しません！」
ダンスをやめようとした私の手を、アルヴィン様はぐっと掴む。
「美しきリイナ姫とのせっかくのダンスの機会……これを逃しては、レフシア王国第二王子の名が廃ります！」
それで名が廃るとはどんな名ですかっ！　と、私は心の中で叫ぶ。
「でも、あの、これ以上アルヴィン様の足を踏むのは……」
「いいえ、構いません！　リイナ姫、貴女に足を踏まれなければ、それはレフシア王国第二王子にあらず！！」

だから、レフシア王国第二王子とはどのような方なのですか！！
私はかろうじて、そう叫ぶのを抑えた。でも……心の中に、湧き上がる疑問。
第二王子の条件って、マゾなことなの？

「あ、あら、アルヴィン様はおもしろい考えをお持ちのようですね……あは、あはは……」

苦笑を通り越した苦笑を浮かべる私。アルヴィン様はにっこりと、まるで早朝の風のような爽やかな笑顔。他の人たちは、私たちの温度の差にびっくりしないんだろうか。その時、

「……姫、アルヴィン、周りの人が好奇の目で見ていますよ」

爽やかな笑顔と、苦笑、それに割り込んだのはイル様の地獄から聞こえるような声だった。

「兄上！　好奇の視線とは……周りの方々が、私とリイナ姫を祝福する瞳、ではありませんか？」

アルヴィン様の頭の構造はどうなっているんだろう……と、私は心の中で呟く。

「アルヴィン……勘違いしているのか？　姫は私の婚約者だ。もちろん、私が望んだわけではないし、婚約も破棄できるものなら破棄したい。でも、今は姫は私の婚約者だ。お前が姫と祝福されることはないんだが……」
「破棄できるものなら破棄したい？　兄上がリイナ姫との婚約を破棄するのなら、私がリイナ姫と婚約したいですね」

アルヴィン様が素早く返答したからイル様を殴る……いえ、イル様に私が言う機会はなかったけど、“婚約を破棄出来るものなら破棄したい”？　それは、私の台詞だわ。
私はふるふる震える右拳を、左手で抑える。ここには、たくさんのお客様がいる。だめ、だめ、殴ってはだめ……！

「アルヴィン……お前はそんなんだから、皆から“女たらし”などと裏で言われるんだぞ」
「兄上こそ、“あんなに女に興味がないとは、もしや衆道（ホモ）ではないか”と言われているんですよ」

私がふるふる震えているのにも気づかず、兄弟喧嘩のようなものを続ける二人。
良い機会だ、と私はそこを離れようと……した。

「姫、お待ちを。アルヴィンと踊ったのに私と踊らないのでは、恰好がつかないでしょう」

私の手を掴んだのは、以外にもイル様。

「……そうですね。では、一曲だけご一緒に踊りましょう」

私はそう頷いて、イル様の方に手を置く。イル様が私の腰に手を回したのと共に、オーケストラが音楽を奏で始めた。
ワントゥ、ワントゥ……頭の中で、拍子を数える。
もちろん、イル様の足を踏むのに躊躇いはない。でも、ダンスが下手だとバレるのは癪だった。
でもなぜか、イル様からは

「……い……っ、あう……い……だ……」

という、彼らしからぬ声。私はやっぱり、どんなに頑張っても足を踏むらしい。

オーケストラの楽員達もそれを見かねたのか、早々に演奏は終了した。

「も、申し訳ありませんでした……」

私は、とりあえず頭を下げる。

イル様に頭を下げたくないけど、人の目がある。

「いいえ……しかし」

イル様ははぁっとため息をついて、言った。

「姫は一度、ダンスを習われては？」

「姫は一度、ダンスを習われては？」（後書き）

お気に入り登録１００件突破！！
本当に本当に、ありがとうございます！
これからも、よろしくお願いします！！

「イル様、ご覚悟！」

「……イル様、ご覚悟！」

私はそう呟いて、握った右拳をイル様に突き出す。

でも――――それは、イル様の手に阻まれた。ぱしっ……という乾いた音を立てて、私の渾身の拳はあっけなく止められる。

「姫……」

イル様が、呆れた声を出した。

そこで、私ははっと気づく。周りには、各国から招かれた賓客や、イル様の父王やお妃様。

どうしよう――――、

「護身術を習うのは良いですが、ここで練習するのはどうなのですか？」

「……え？」

わけのわからないイル様の言葉に、私はきょとんとする。

「それに、姫は護身術など習わなくとも、私がお守りしますよ。大切な、婚約者なのですから。

もっとも、その姫の責任感は素晴らしい。ご自分が一国の王女であると、ちゃんと自覚なされているのですね。私はそんな素晴らしい王女の婚約者で、嬉しい限りです」

ぺらぺらと、イル様は言う。何？　何？　何が起こっているの？

イル様が、私のことを“素晴らしい王女”って言った？　ありえ

ない。

「イル様？　一体、なんのこ……」

「姫」

私が全てを言う前に、イル様は私の口を抑える。

そして、ずいっと顔を近づけて小さな声で囁いた。

「私が殴られたら、大問題でしょう。お忘れですか、この宴には、異国の客人がたくさん来ているのですよ。ここは、私に合わせてください」

そう囁いたイル様の目は、私の見慣れている“呆れた目”。私は、こくこくと頷いた。

確かに、イル様の言う通りだ。

「そうですね、イル様はお強いですもの。私が護身術など習う必要はありませんでした」

声を大きくしてそう言い、作り笑いを浮かべる。

「いやいや、しかし姫のその心掛けは素晴らしい」

イル様も作り笑いを浮かべ、そう言う。

そして、笑いあう私達――――。事情を呑み込めないナミとユアンが、遠くから不思議そうな顔で私達を見ている。

「いえいえ、イル様こそ素晴らしいお心をお持ちですよ」

そう言いながら、私はそろそろと後ずさりする。

早くここから立ち去らないと、言いたくもないことを言い続けることになる。
イル様も同じ考えなのか、他の客人と話し始めた。よかった……
そう思った途端に、目の前にはナミの顔。
驚きで、目がまん丸くなっている。

「な、ナミ……？　どうしたの……？」

私がきょとんとして聞くと、ナミはずいっと顔を近づけた。

「お聞きしたいのは私です、姫様！　先ほどのやりとりはなんなのですか？
姫様はイル様をあそこまで褒めるのですかっ！？」
「え？　まさか、違う違う違う違う！　今のは不可抗力よ」

私は、手をぶんぶん振って全否定する。
私がイル様を褒めただなんて冗談じゃない！

「ですよね！　姫様に何かあったのかと、私、心臓が止まるかと思いました……。
でも私は、たとえ姫様がもし、万が一、天と地がひっくり返ってイル様をお慕いすることになっても……」
「ナミ？　そんなことは、ありえないわ」

私は、ナミにそう低い声で言う。
ああ、なんで私、ナミと話しているのに完全燃焼の白い炎が出てるんだろう……。

「も、申し訳ありませんでした、姫様。そうでした……私、とんでもないことを……！

今、ユアンに小刀を借りて、死んでお詫びいたします……ッ！」
「ナミ、俺は絶対に小刀を貸さない。死んじゃだめだ、俺の前から消えるなんて……ッ！
ナミが死ぬくらいなら、俺が死ぬから！」
「ユアン……そんな……それは嬉しいけど、でも、私は姫様にとても失礼なことを……！」
「ナミ、でも君が死んでしまったら、とても困る。ルーン王国の損失……いや、世界の損失だ！」
「ユアン……」
「ナミ……」

……私は、現れて１０秒でこんなメロメロな展開にしてしまうユアンを尊敬したい。
ナミの肩に手を置くユアンを見て、私は心底そう思った。

「あら、リイナ様ではありませんか」

呆れ顔でナミ達を見ていた私の背後から、高いきんきん声がした。
知ってる声じゃないけど……と、私は首を傾げながら振り向く。

「お初にお目にかかります」

後ろにいたのは、やっぱり知らない、同い年くらいの女性。
長い黒髪を一つに縛っていて、ピンク地に金の刺繍という、とてつもなく趣味の悪いドレスを着ている。そしてそのドレスが……彼女の可愛さを台無しにしていた。
黒い二重の瞳はぱっちりしていて、頬は健康的な肌色で、頬が赤くて、唇がピンクで、つまり本当にかわいらしい女の子なのに……ファッションセンスが無い。
一体、どこの娘なんだろう。

私のその質問に答えるかのように、その娘(こ)は名乗った。

「私(わたくし)、レフシア王国第一王女のアリス・アヴィンセルと申します。イルお兄様と、アルヴィン兄様の妹ですわ」

「イル様、ご覚悟！」（後書き）

佐倉風弦さまより、リイナとイルのイラストを頂きました！

ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｐｉｘｉｖ．ｎｅｔ／ｍｅｍｂｅｒ｜ｉｌｌｕｓｔ．ｐｈｐ？ｍｏｄｅ＝ｍｅｄｉｕｍ＆ａｍｐ；ｉｌｌｕｓｔ｜ｉｄ＝２３１０８６１３

とても可愛らしいです！

そして、今回では新キャラ登場。
こいつもまた、イニシャルＡ，Ａです。↑
そしてそして、濃いキャラな予定です。↑
アヴィンセル王家はどうなっているのか……。

……卒業研究がまだまだで提出が明後日なのに、なんで更新してんだって自分に問いかけます。↑

「貴方にイルお兄様は渡しませんわ。この女狐」

「イル様の、妹君……」

私は、アリス様を見つめる。

やはり、外見は遺伝だ。イル様やアルヴィン様の美形を受け継いでいる。もちろん、女ヴァージョンで。

「私、イル様の婚約者であるルーン王国第一王女、リイナ・リンスレットです。よろしくお願いします」

にこっと笑って、私も挨拶を返す。

イル様の妹君とは言えど、仲よく出来そう。彼女の笑顔を見たときそう思ったのだ。

でも……、

「リイナ様、一言だけ、言わせてくださいませ」

それは、大きな間違えだって気付いた。

「貴方にイルお兄様は渡しませんわ。この女狐」

そんな言葉が、聞こえた。

「……ん？」

私はきょろきょろとあたりを見回す。

誰かが、喧嘩でもしてるのだろうか。でも、そんな様子は見えな

い。

「何きょろきょろしてるんですの。貴女のことですわ、この狐姫」

でも、やっぱり声は聞こえる。

この鈴を鳴らしたような、可愛らしい声は……。

「あ、アリス、様？」

私はきょとんとして尋ねる。

アリス様は、笑顔のまま。無邪気な笑顔は、とても可愛らしい。

でも、さっきのは……。

「アリス様、一体どういう……」

「お言葉の通りですわ、狐姫」

私は狐姫じゃなくてリイナなんだけど……。

私の心の声に気付くはずもなく、アリス様は言う。

「イルお兄様は、私のものですわ。貴女との結婚なんて、私が絶対阻止します」

そういって、びしっと私に人差し指を突きつける。

そう言われて、思わず出た言葉。

「どうぞ、阻止してください」

それを聞いて、アリス様は目を丸くする。

それはそうだ。私はイル様の婚約者なんだから。でも、阻止してほしい。

「リイナ様？　なぜ……？　貴女は、お兄様が好きじゃないんですの？」

きょとん、とした表情で、アリス様は私に尋ねる。

“狐姫”ではなく“リイナ様”なのは、動揺のせいだろうか。

「はい。もちろんです。アリス様の兄君ですから、悪く言うのも失礼とは思いますが……。

私には、あの方の魅力が分かりません。どうぞ、私たちの結婚を阻止したいのなら阻止してください。私は、心からそれを願っています！」

私はそういって、アリス様の手をがしっと掴む。

ここで私が頑張って、アリス様とイル様がくっつけば――――！

そんな、期待のこもった目で私はアリス様を見つめる。

「……」

アリス様は呆気にとられた顔で私を見て――――、

「なんですの！　それは！　お兄様の魅力が分からないっ！？」

そう、悲鳴に近い声を上げた。

アリス様の高い声は、大広間によく響く。人々の視線が一気に私たちに集まった。

「あ、アリス様？」

「リイナ様、貴女、お兄様の魅力が分からないと仰りましたか？

よもや私の聞き間違いでは？」

アリス様は人の視線に気づくこともなく、続ける。

「まさか、この世にあの麗しきお兄様の魅力が分からない方がいようとは……！

どんな方も、お兄様に心惹かれずにはいられないというのに！世も末ですわ！」

「あ、あの、アリス様……」

「アルヴィン兄様のことなら分かりますわ。兄様は娘を毎日毎日変えるような軽い男ですもの。

でも、お兄様は素晴らしい、文武両道で、今まで一度も娘に現（うつつ）を抜かすような方ではないですもの！

なのに、その魅力が分からない？　リイナ様、ご冗談もほどほどになさいませ！」

私が口をはさむのを許さず、アリス様はそれを一息で言った。

そして、はーっと大きく息をつく。そして、私を睨んでもう一度口を開いた。しかし、

「リイナ様、貴女が――――」

「アリス」

アリス様の口は、誰かの手によって塞がれた。それは、

「イルお兄様……！」

アリス様の頬が、一瞬で真っ赤になる。

ふらり、と倒れかけたアリス様を、イル様は支え起こした。

「アリス……客人の前だ。皆の視線を一気に集めていたぞ。落ち

着け」

イル様は少しため息をついてそう言う。

「はい、申し訳ございません、お兄様……」

素直に謝るアリス様。

今だけは、イル様に感謝。私は、心の底からそう思った。

「貴方にイルお兄様は渡しませんわ。この女狐」（後書き）

ああ……アリスのキャラが濃い。
ここは異世界なので、兄弟婚もありです。確か、古代エジプトとかでも兄弟婚はあったみたい……です（？）

そして、更新に約一週間かかってしまった……！
すいません。次は、もう少し早く更新できますように――！

「ご冗談も休み休み言ってくださいませ！」

「姫、アリスが失礼を。アリスも、場を考えないところがあるのです」

イル様はそう言って、私に頭を下げる。

嫌な男だけど、こういうところはちゃんとしているらしい。

「あ、いえ……。アリス様は、イル様のことがとても好きなのですね」

「そうですか？　まあ、とても慕ってくれますが…　…」

イル様はそう呟いて、アリス様をちらりと見る。アリス様の頬が赤く染まった。

「イル様は、アリス様をどう思っていらっしゃるんですか？」

私は微笑んでイル様に訪ねる。うまくいけば、私との結婚を無しにしてくれることを祈って。

でも、イル様の答えは

「アリスは、ダンスも歌も楽器も、学問も出来る子です。

場を考えない、というところを除けば、誇りに思える妹ですよ」

というもの。……妹、ではなく女の人、って見てくれないだろうか。

「ほら、あの、イル様はアリス様を女の方としては見ないのです

か？
アリス様はイル様を凄く好きなようですし……」
「そうです！　イル様、姫様はもっと良い方と結婚しますからイル様はアリス様と！」
私の横から急にナミが顔を出して、言う。
「わっ、ナミ。びっくりした。でも、そうよね。そうです、イル様」
思わぬ援護射撃にびっくりしながらも、私は頷く。
イル様はというと———なぜか、こめかみに手を当ててため息をついていた。
「姫、貴女は私の婚約者なのですよ。本意はどうであれ、そんなことを言うのはどんなものかと」
「そ、そうですけ、ど……」
反論しようとして、イル様の言っていることが正論であることに気付く。
反論しようにも、言葉が見つからない。
「……」
黙り込んでしまった私を見て、イル様は再びため息をついた。
「……婚約者に対してため息をつくのもどうかと思いますが」
む、と思って私がそう言うと、

「その婚約者を殴ったのはどこのどなたですか？　姫」

イル様は表情を変えずにそう返す。

それは……ッ、と言いかけたのを遮ったのは……今度は、ナミではなくアリス様だった。

「今なんといいましたかっ！？　殴った！？　この女狐姫がイルお兄様を殴ったですって！？

イルお兄様、それは本当ですの！？　この女狐姫！　謝りなさい！

今すぐ床に這いつくばって土下座をし、イルお兄様に心からの謝罪をするのですわ！」

甲高い声でそう言いながら、私に指を突きつけるアリス様。

「あ、あの、アリス様……」

「何をもごもごと言っているのです！　今すぐなさい！」

「あの……えっと……落ち着いてくださ……」

「私は落ち着いていますわ！　落ち着いていないのは貴女ではなくて？　イルお兄様を殴るだなんて、発狂したとしか思えませんわ！　イルお兄様の美しいお顔に、傷がついたらどうするつもりでしたの！？」

あまりのアリス様の迫力に、私は返す言葉が見つからない。

それを助けたのは———やはり、イル様だった。

「アリス。さっきも言っただろう。たくさんの賓客の前だ。

それに、姫はお前の姉上になる女性だぞ」

アリス様の口に手を当てて、そう言うイル様。

はい、とアリス様はしゅんとした。

「申し訳ありませんでした、イルお兄様……。でも、やはり、私は納得できませんわ！
この女狐姫がイルお兄様を殴ったなんてっ！　イルお兄様、私なら絶対にお顔を殴ったりしませんわ！」

じいっとイル様を見つめるアリス様。
私は心の中でひそかに、この二人が上手く行くことを願う。

「アリス……。言っただろう、この姫は私の婚約者だと。生まれた時から決まっていた許嫁だと。
お前にも、婚約者がいるだろう。……この宴には来ていないが、確か隣国の……」
「私はイルお兄様をお慕いしているのですわ！」
「……あの、アリス様」

二人の会話を聞きながら、私はおずおずと話しかける。
さっきから少し疑問に思っていたこと。それは――、

「アリス様は、アルヴィン様のことは――？」

アリス様が、なぜこんなにもイル様にだけぞっこんなのかということ。
アルヴィン様も兄……よね？
でも、私の質問を聞いた途端、アリス様は顔色を変えた。
イル様と話しているときはピンク色で、天女のようだったのに今はどこからどう見ても鬼女にしか見えない。

「アルヴィン兄様？　まぁ女狐姫、よくもそんなことを私に尋ねますのね。

私はアルヴィン兄様を慕ったりなどしませんわ！　あんな、女たらしの兄様を！？　一日一日女をとっかえひっかえの兄様を！？　貴族であろうと奴隷であろうと、美しい娘がいると聞いたらどこえでも飛んでいく兄様を！？　ご冗談も休み休み言ってくださいませ！」

まるで怒り狂った獣のように、それだけを一息で言ったアリス様。それを聞いて、再び思ったこと。

「……そんなアルヴィン様と、アリス様と、イル様。本当に血の繋がりはあるのかしら……？」

兄弟だと分かっていても、それを疑うほどの性格の持ち主たちだった。

「ご冗談も休み休み言ってくださいませ！」（後書き）

更新が遅れてしまい、申し訳ありませんでした。
テスト、という地獄に行っていたので……↑

お気に入り登録１２０件突破、ありがとうございます！

「幾千の星の輝きも、貴女の前では陰るというものです」

「アリス、呼んだか？」

急に、私のすぐ隣から声がした。

声の主は、アルヴィン様。彼は、今の今まで実の妹から批判されていたことを知っているのだろうか。

「あら、アルヴィン兄様。別に、なんでもありませんわ」

イル様への態度はどこへやら、アリス様はふいっとアルヴィン様から顔を背ける。

「アリス、なんでお前はいつも……。そんなに私のことが嫌いなのか？　あのな、私は何も、アリスに嫌われるようなことをした覚えはないんだが……」

「あーら、アルヴィン兄様。毎日毎日町の娘を変えているのはどなたですの？

私からすれば、アルヴィン兄様は兄様とも思いたくないほど、はしたないお方ですもの。

アルヴィン兄様もイルお兄様を見習って、少しは態度を改めては如何ですか？」

唇を尖らせて、アルヴィン様を睨むイル様。

なんなんだろう……この兄弟……。結局、

「……リイナ姫。アリスは放って、私と共にバルコニーに出ませんか？

我が城から見る星空は、レフシア王国の自慢の一つなんですよ」
アルヴィン様はアリス様を無視して私に話しかける。
「星空、ですか？　そうですね、それは是非見たいです……一人で」
私はにこっと笑いながらも、“一人で”の部分を強調する。
このイル様とアリス様のところから解放されるのは万々歳だが、アルヴィン様といっしょに星空を眺めるなんて、冗談じゃない。
でも……、
「アルヴィン様、これはどういうおつもりですか？」
アルヴィン様の手は、私の手をがっしりと握っている。
しかも、見た目以上に強い力。どんなに力を込めても、私の手はぴくりとも動かない。
「美しい星空は、是非美しいリイナ姫と共に見るべきだと思いませんか？」
「思いません」
私はきっぱりそう答えると、ぐいぐいと手をひっぱる。
でも、アルヴィン様の手は力が強くて離れない。馬鹿力というのだろうか。馬鹿は、頭だけで結構なのに。
そんな失礼なことを考えながらも、私は手を引っ張り続ける。
「……アルヴィン様、いい加減お手をお放しください」
「いいえリイナ姫。私は決して、この手を放したりなぞいたしません。ええ、そうです、永久（とわ）に。

綺麗な星空に在る月の神でさえ、私達の中を裂くことは出来ないでしょう」

アルヴィン様の口から紡がれた言葉に、私は思わず固まる。
変態だとは分かっていたけど、まさかこれほどまでとは……。今までにないくらい、鳥肌が立った。

「な、ななな……」

ナミ、と呼ぼうとする。でも、そういえばいつの間にか私の傍にナミの姿は無い。
きっと、ユアンとどこかで……。私はそう考えて、心の中でため息をついた。

「……あっ、あの、アルヴィン様！」

はっと思いついて、私はある一点を指差して言う。

「ほら、あそこにとても美しい女性がいますよ。レフシア王国の貴族の方でしょうか？
とても綺麗ですね。私、あんなに綺麗な方になんて、会ったの初めてです！」

さっきのアリス様の言葉――――「一日一日女をとっかえひっかえの兄様を！？　貴族であろうと奴隷であろうと、美しい娘がいると聞いたらどこえでも飛んでいく兄様」――――を、思い出したのだ。
きっと、美しい女の人がいると聞いたら、そっちに飛んでいくはず――――！

「そうですか？　リイナ姫、ご心配はいりません。この世に貴女

より美しいものなどいませんよ。
貴女は天界の女神に等しい――――。もしや、貴女は空からこの地へやってきたのでしょうか……？」

いや――――――っ！　と、心の中で私は叫ぶ。
一体、アルヴィン様の思考はどうなっているんだろう。王子でなければ、あまりの変態さに衛兵に捕まっているんじゃないだろうか――――。

「さあリイナ姫、ここは五月蠅い。二人で、美しき星空を見に行きましょう。
もちろん、幾千の星の輝きも、貴女の前では陰るというものですが」

アルヴィン様はそう言って、私の肩を抱いて歩き出す。
もう、無駄な抵抗をして精神的に疲れるのはやめよう――――。

「そうですね、アルヴィン様」

私は、もう流れに身を任せることにした。

「幾千の星の輝きも、貴女の前では陰るというものです」（後書き）

アルヴィン……いやーっ！　と、作者も喚いています。↑
うーん、作者はもののけのアシタカとか植物図鑑の樹みたいな男の子が好きなのに、なぜこの作品に出てくる男性キャラは……こうなのでしょうか（苦笑）。

５００００アクセス突破、ありがとうございます！

「貴女のその輝く瞳も、私に見せてはくださいませんか？」

「リイナ姫、あちらを見てください。やはり、今日は月が美しい」

アルヴィン様はそう、黄色くまんまるい月を指指して言う。

「そうですね。とても美しいです」

私は月だけを……アルヴィン様など視界に入れず、月だけを見ながらそう頷く。

リイナ姫……と、アルヴィン様がなぜか落胆したような声を出した。

「もちろん月も美しいですが、貴女のその輝く瞳も、私に見せてはくださいませんか？」

そう言って、私の顎をくいっと上げて、自分と視線を合わせるアルヴィン様。

あまりのことに、私の口は金魚のようにぱくぱくとした。

「どうしました？　……ああ、なるほど、理解しました」

アルヴィン様は、そう頷く。その瞳は優しさに満ち溢れている……のだけど、私には恐怖以外の何物でもない。

何を理解したのですか、と聞きたい私の口に人差し指を当て、アルヴィン様は首を横に振る。

「何も仰らなくて良いですよ。私には、伝わっています」

だからいったい何が伝わっているのですか、と尋ねる間もなく、アルヴィン様は私の肩に手を置き、向かい合う。
そして、その整った顔がどんどん近付いて来て、私との距離は０に――――ッ、

「――――って、アルヴィン様！　い、いいい、一体、な、ななな、何を……ッ！」

なる前に、私はアルヴィン様を勢いよく突き飛ばした。
転ぶまではいかず、少しよろよろとした彼は、きょとんとした顔だ。

「何をも何も……キスです。接物。純情なるリイナ姫は、ご存じではありませんか？」
「し、知っています、キスくらい！　で、でも、なぜ急に……」

おろおろとしながら、私は言う。最初の驚きが過ぎると、恥ずかしいばかり。きっと、私の顔は真っ赤になっているだろう。

「なぜって……。リイナ姫が、私のキスを求めたのでしょう？口をぱくぱくさせていたではありませんか」
「私はアルヴィン様のキスなんて求めていません！」

アルヴィン様の答えに被せて、私は叫ぶ。
一体、どうしたらそんな理解になるのだろう。

「そうですか。これは、間違えてしまい申し訳ありませんでした」

アルヴィン様は、そう頭を下げる。が、その顔は少し微笑んでいて、反省なんてしていなさそうだ。

私は、深いため息をついた。

「もう、私は中に戻ります。アルヴィン様は、どうぞお一人で、星をお楽しみください」

私はそう言うと、つかつかと中に戻った。

＊＊＊＊＊＊

「なんなのよ、アルヴィン様って！　わ、わ、私に、き、き、き、き、キスを……ッ！」

私は、ナミを相手にそう愚痴を漏らした。

ナミはこくこく頷きながら聞いていたが、“キス”という単語を聞いた瞬間、形相を変えた。

「なんですってっ？　き、きき、キスですか！？　姫様に！？　あの変態王……じゃない、アルヴィン様が、姫様に！？」

ナミは目を見開いて、私にずいっと顔を近付けた。

「え、ええ。そうよ、本当に！　星を見て台詞をいって、変で、私ぱくぱくして、変な理解して、近付いてきて、距離が０にならなくて、それで……ッ！」

「ひ、姫様、お待ちください、あの、言ってることが支離滅裂ですっ」

ナミが、おろおろと私を制止する。

「あ、ご、ごめん。でも、ほら、だって、私、アルヴィン様にキスされかけて……」
「ええ、分かります。姫様の動揺が凄く良く分かります！　アルヴィン様、信じられませんわ！」
「何が信じられないんです？」

急に介入してきた声に、私たちは同時に振り向いた。
そこには……、

「ユアン！」

1トーン上がったナミの声が、その人物の名を呼ぶ。

「リイナ様、一体何があったんですか？」

ユアンが、そう私に尋ねた。人前だから敬語を使っているけど、瞳が“幼馴染の身に何が起きたのか気になる”と語っている。でも、

「ちょっと、ね。信じられないこと。アルヴィン様って知っているでしょう？」

とりあえず、ユアンでもナミでも愚痴を聞いてほしい。
私の質問に、ユアンは頷く。

「ああ、この国の第二王子ですね。イル様の弟君の」
「そうよ。その人が私に……き、き、キスしようとしたのっ！」

私の言葉に、ユアンは……驚かなかった。というより、何の反応もしない。

ユアンの視線は、私からナミへと移る。

「……ユアン？」

「ナミ」

私を無視して、ユアンはナミに話しかける。

人前なのに、王女の言葉を無視していいのだろうか……。

「どうしたの、ユアン？」

ナミは、とろけるような瞳でユアンを見る。ここに来て、ナミとユアンの仲がいつも以上にラブラブになったと思うのは、私だけだろうか。

「君は、俺にキスを求められたら拒むかい？」

ユアンのその質問に、ナミは真っ赤になる。

「まさか……。拒むはずがないでしょう？　だって……ユアンだもの」

「ナミ……」

「ユアン……」

いちゃいちゃしている二人から、私は離れる。なんなんだろう、あの二人は。

そして、近くのテーブルにあった水をごくごくっと一気に飲んだ。

「んんー……おいしい」

そして、もう一杯。それを飲んで、もう一杯。とりあえず、飲ん

で飲んで飲む。そこで、“姫様！”という声が聞こえた。
振り向くと、そこにはナミ。
「あら、ナミ、どうしたの？　ユアンは？」
私の質問には答えず、ナミは言う。
「姫様、それはお酒ですよ！　姫様はお酒にとても弱いのではありませんでしたか！？」

「貴女のその輝く瞳も、私に見せてはくださいませんか？」（後書き）

アルヴィン、変態度が増しております。
ナミとユアン、いちゃいちゃに拍車がかかっています。
イルとリイナ……全く進展無しです。なんで、２０話も使って進展がないのでしょうか……。

まぁ、二人の仲はさておき↑

読者様、良いクリスマスイブ&クリスマスを。

Ｍａｒｒｙ　Ｘｍａｓ！！

「リイナ姫は酔って――――いえ、泥酔しておられます」

「お、お酒っ！？」

ナミの言葉に、私は思わず水――――いや、お酒を吹きそうになる。
そういえば、少し苦い気がする。

「ひ、姫様、早くお水で酔いを醒まして……ッ！　絶対に、酔った状態でイル様に会ってはいけませんよ！？」
「わ、分かってる、わよぉ……ッ！　だ、大丈夫よ、ほんのすこーしの……お酒、くらいぃっ」

ああ、駄目だ。私は、心の中でそう呟いた。
心の中は冷静を保っている。でも……口からは、言おうと思っていない言葉。

「ほんの少しのお酒ではありません！　少なくとも、3杯は飲んでいるじゃないですか！　早く部屋に行って、休みましょう？」
「大丈夫だって……私、もっと、飲むのぉ……」
「姫様、酔っているということは分かりますから、だから――――」
「これは、何事ですか？」

ナミの言葉を遮ったのは――――何でこのタイミングなのだろうか――――イル様。
イル様は、決して好意的ではない目で私とナミを見ている。

「なんでもありませんわ。姫様が少し疲れたようなので、部屋におつれしようかと」

尖った声で、ナミが言う。
イル様は頷いて、
「そうですか。これは、邪魔をしてしまいましたね。姫は顔が赤いようだが、熱ですか？　もしそうなら、医者に連絡を致しますが」
そう、言った。思ったより優しい言葉に、私は思わずきょとんとする。
「いいえ、熱ではありません。普段は姫様に冷たいのに、此度だけは優しくするのですね」
あら珍しい、とでも言いたげな瞳をして、ナミが言う。
「当たり前でしょう。姫は我が国の大切な賓客であり婚約者。その扱いを疎かにしては、レフシア王国の名が廃ります」
イル様はそうため息をつくと、私を抱き上げる。そう、つまり、これは世に言う“お姫様抱っこ”。
“今すぐにおろしてください、お願いします。イル様に抱っこされるなんて、具合が悪くないものも悪くなります”そう、言いたい。心から。なのに、
「大丈夫ですよぉ、イル様。私はまだまだ飲めますから」
口からは、訳の分からない台詞。
は？　という目で、イル様は私を見る。
「飲めますから、とは？」

そう尋ねて———、近くのテーブルにある、5杯の空になったグラスを見る。
そして、イル様はナミに視線を移した。
「もしやとは思いますが……姫は、酒に酔っていらっしゃるのですか？」
ぴき、という音が、イル様のこめかみから聞こえた気がした。
そして、その音はナミにも聞こえたらしい。
「まっ、まさか！　姫様はお酒に弱いんです、飲むはずがございません！　普通に、ただ単に、部屋でやすまれるという———」
「リイナ姫、なぜ兄上に抱かれているのですか？」
ナミの言葉を遮ったのは———なんとタイミングが悪いのか、アルヴィン様。
「アルヴィン、丁度良かった。お前は酒に酔った娘をよく見ているだろう。姫はどうだ？
この赤く染まった頬は、熱によるものか？　それとも酒によるものか？」
「熱？　酒？」
アルヴィン様は、ずいっと私に顔を近付けた。
近いです、アルヴィン様。どうか、どうかお願いですからその顔を離してください。
というより、『お前は酒に酔った娘をよく見ているだろう』とは、どういう意味なのでしょうか。
そういうところで頼られるのは、どんな心境なのですか。

私は、心の中でそう言う。でも、口から出るのは――――、

「アルヴィン様、ご一緒に飲みませんか？　ほら、あそこのフルーツカクテルなんか、とてもおいしそうで……」

そんな、私の意志とはまったく関係のない言葉。

いつのまにか、足もふらふらしてきた気がする。

「兄上、これは間違いありません」

アルヴィン様はそう言って、イル様に向き直る。

「リイナ姫は酔って――――いえ、泥酔しておられます」

待った――――！　心の中で、私は叫ぶ。

酔っています、は良い。でも、泥酔ってなんですか、泥酔って――――！

“失礼です！”と、今すぐアルヴィン様に言いたい。でも、

「泥酔でもなんでも良いですから、飲みましょう――――ね？」

なぜか私の口はそう言って、私の右腕はイル様の腕を、私の左腕はアルヴィン様の腕を掴んだ。

「そうですね。酒に酔いしれ、頬の赤く染まったリイナ姫も美しい……。どうせなら、私の部屋で飲みませんか？　ぜひ、兄上抜きで」

いや――――――っ！

心の中でそう叫ぶ。お酒に酔っていなかったら、私はアルヴィン

様を突き放していたはず。
だけど――――、
「そうですね。ぜひ飲みたいですわ」
私の手は、差し出されたアルヴィン様の手を――――握らなかった。
「アルヴィン、いい加減にしろ。姫も、これ以上一滴たりとも酒を飲んではいけません」
イル様が、私の腕を掴んでいる。普段の私だったらすぐにこの手を引っ込めるはず。
でも、
「そんな堅いこと言わないで、イル様も是非ご一緒に」
ぎゅっとその腕を掴む私。
ああ、お酒なんて飲まなければ良かった……。

「リイナ姫は酔って――――いえ、泥酔しておられます」（後書き）

大晦日です！
今年最後の更新になります。リイナ、酔っちゃいましたね。

そして、４００ｐｔ突破、ありがとうございます！
来年も、どうぞよろしくお願いします。

「リイナ姫、私の自室でゆるりと語らいませんか」

「――様？　姫様？」

ナミの声が、遠くで聞こえる。私は、重い瞼をゆっくり開けた。
ふわふわのベッドに寝ている。私の寝室……というか、客室だ。
そして、

「姫様！　大丈夫ですか？」

そこには、ナミ。――なんで、ナミ？
私の記憶は、イル様とアルヴィン様をお酒に誘って――そこで、
終わっている。

「ナミ……私……あの後、どうしたの？　記憶が真っ白……」
「えっと……だ、大丈夫です！　姫様は何にもされていません！
アルヴィン様のしつこいお誘いは、私がきっぱりお断りしました
から！　姫様はアルヴィン様のお部屋の敷居を、一足も跨いでいま
せんから！」

ナミが、そう熱く言う。

「……え、ナミ、私、昨日、本当に何があったの……？」

ナミの言葉に、少なからず……というより、とてつもなく心配を
感じる。
私の心配そうな顔を見て、ナミは慌てて手をぶんぶんと振った。

「いえ、あの、本当に何にもありませんよ？　アルヴィン様が『リイナ姫、私の自室でゆるりと語らいませんか』と言っていて、姫様は『ええ、是非……』と言っていましたけど、私がきっぱりお断りをしましたから！」

「……ナミ、私、『ええ、是非……』って言ったの……？」

耳を疑う言葉を聞いて、私は思わず聞き返す。

ナミは言いづらそうにしながら、頷いた。

「……いやーっ！　もう嫌、私、帰るわ！　ルーン王国に帰る！　アルヴィン様にもイル様にももう会えない！　会いたくないし！」

私はそう叫びながら、掛け布団を被る。

ちょっと飲んだだけが、そんなに恥ずかしいことになるなんて思いもしなかった。

「ええ姫様、帰りましょう！　私も姫様に賛成です！　いますぐ荷物をまとめるので――――」

「ナミ」

ナミの言葉は、ユアンの声によって遮られた。

この状況でいちゃいちゃするの……、と思い、私は布団から顔を出す。

「ユアン！　どうしたの？」

「今すぐルーン王国に帰る、とか駄目だぞ。ナミ……君は賢いから分かるだろう？」

ユアンはそう言って、ナミの肩を抱く。

だから――――なんで王女（わたし）が恋愛で悩んでるのに、その侍女（ナミ）と騎士（ユアン）

がいちゃいちゃラブラブしてるの！

「ユアン……分かっている、けど……。でも、姫様があまりにもお可哀想で……」

「君の気持ちは、リイナもよくわかってるさ。俺も、ナミの気持ちは凄く分かる。でも……耐えられるよな？」

ユアンはそう言って、ナミの瞳を見つめる。

ナミは頷いた。……私の意見より、ユアンの意見なのかしら。

ユアンは頷くと、今度は私に目を向けた。

「そうだ、リイナ。イル王子からの伝言だ」

「イル様から！？　……何？」

警戒心を丸出しにして聞いた質問。その答えは、信じられないものだった。

「今日、イル王子やその家族で茶会をするから、リイナも是非参加を、だってさ」

「……それ、本当の話？」

ユアンの言葉に、私はかすれた声で尋ねた。

イル様に、アルヴィン様に、アリス様。そして、あの衝撃的な色合いのドレスを着ていたお妃様と、豪快な国王様。

物凄く濃いお茶会になりそうだ。

「本当本当。今は１１時で……茶会は１時からだって。ま、昼食会ってところだな。これ、ここに来る途中でイル王子に貰った手紙」

ユアンはそう言いながら、私に白い封筒を渡す。

表には、アヴィンセル王家の紋章。中に質の良い紙が入っていた。
「リイナ様、本日1時より、茶会を開きたいと思っております。是非、我が国の第一王子イルの婚約者であるリイナ様もご参加いただきたく、筆を執った次第です。
では、良い返事を心待ちにしております。……レフシア国王」
ナミが横から、その文面を音読する。
「……姫様、如何いたします！？　姫様お一人であの家族の中に飛び込むなんて、一羽の兎が虎の穴に飛び込むようなものですよ！？」
「……ナミ、その例え、すっごく行くのが嫌になる……」
「リイナ、行かないのは王女としても婚約者としてもだめだぞ」
そんなの分かってる、と、心の中でユアンに突っ込む。
「……分かった。早くお茶飲んでお菓子食べて、早く帰ってくる」
私のその言葉に、ユアンはため息をつく。
「普通にイル王子達と会話して来いって。てか、王族同士の茶会は食事がメインじゃなくて会話がメインだから」
「……もう、ユアンはなんでそう正論を言うのよ」
私はうなだれながら、茶会用のドレスを探す。
「着替えるから、ユアンは出てて。行くわよ、話すわよ、飲むわよ！　イル様とアルヴィン様以外と話してるから！」

「リイナ姫、私の自室でゆるりと語らいませんか」（後書き）

新年、明けましておめでとうございます！
今年もどうぞ、この小説と私、羽月紫苑をよろしくお願いいたします。

そして、一つ謝罪を。
……いわゆる「タイトル詐欺」ですよねすいません！
ストーリー中に、良さげな台詞が見つからなかったのです。

ちなみに短くてすいません！　次は２０００字超えてます。茶会です。イルもアルヴィンもキャラ発揮ですので、乞うご期待！　です（なんて（笑））。

「姫、子供ではないんですから紅茶を口いっぱい含むのはお止め下さい」

「どうですかな、リイナ殿。この紅茶は我が国で一番の茶葉でしてな。お口に合ったかな？」

国王様が、豪快な声で聴いてくる。

「ええ、とってもおいしいです、国王陛下」

にこ、と私は笑顔を浮かべた。本当は、この家族に囲まれた精神状況で、紅茶の味なんかわからないけど。

「……ところで、姫」

私の隣に座っていたイル様が、小さな声で言う。

「昨日の件について尋ねたいのですが――――よろしいでしょうか？」

「ごほっ！」

イル様のその言葉に、私は咳き込んだ。

紅茶を吹き出さなかったことが唯一の救い、だろうか。

「リイナ姫！？」

もう片方の反対に座っているアルヴィン様が、驚いた顔で私を見る。

イル様もアルヴィン様も、同時に白いハンカチを私に差し出す。

イル様は、婚約者だから。アルヴィン様も、普段の様子からして不思議ではない。
でも……この不思議な席順は何なんだろう。嫌がらせとしか思えない。

「す、すいません……。あの、あ、ほら、紅茶があまりにもおいしくて、口に含みすぎてしまいまして」

私は顔に苦笑を浮かべ、そう弁解する。その言葉に返ってきた、三種類の返答。

「まったく、貴女は本当に可愛いお方ですね」
「リイナ殿にそんなに気に入られるとは、茶葉を作った農民も嬉しいでしょうな」
「姫、子供ではないんですから紅茶を口いっぱい含むのはお止め下さい」

どれを誰が言ったかは、明白だろう。
アルヴィン様につっこむべきか、イル様につっこむべきか。迷った末、

「イル様、子供とはなんですか。　私はもう１６歳ですし、決して子供では……っ」

イル様に反論することにした。

「……分かりました、言い直しましょう。子供ではなく、幼いと」
「どちらも同じでしょう！？」

まったく、なんなんだろうこの人は。心の中で、そう喚く。

ただでさえ、イル様にいらいらしている時に――――、

「リイナ姫、頬が赤く染まっていますよ」

反対の隣から聞こえる、アルヴィン様の声。今はイル様でキャパオーバーなのに！

そして――――、キャパオーバーの状態で聞こえる、国王様の声。

「がははは、リイナ殿、勘弁してください。イルとアルヴィンは真反対でしてな。イルがリイナ殿に対して多少憎たらしい口なのも、アルヴィンが甘い台詞ばかり吐くのも、仕方ないのです」

仕方ない、という国王様。国王様には、仕方ないかもしれません。でも、その仕方ない人と婚約者な私はどうすれば良いんですか！

「まぁ、イルも多少口が過ぎると思いますがな。いや、わしは、見目麗しいリイナ殿が初体面に少しくらい遅れたところで、ご愛嬌ですがな。イルはどうも、そういう所が許せない真面目なところがあるものでな」

そう言って、またがははと笑う国王様。

それの笑い声を中断したのは……高い、鈴を転がしたような声だった。

「まぁ、リイナ様はイルお兄様との対面に遅刻したとっ！？　リイナ様、貴女は愚行をいったいいくら積み重ねれば……ッ」

「アリス、黙りなさい」

ばん、と音を立てて立ち上がったアリス様を沈めたのは、今まで挨拶しかしなかったお妃様。

「でも、お母様……ッ！」
「アリス、イルのことになると興奮するのは、貴女の悪い癖でしょう？　もう貴女も１５、その癖を直しなさい？」
「……はい、お母様……」

さっきまで憤っていたアリス様は、今度はしゅんとする。
娘が母に宥められるという、客観的に見ればとても良い図。でも……それを邪魔するのは、アヴィンセル王家の女性の欠点の鉄板と化しているのか……二人のファッション。
お妃様は、同じ色のドレスを何枚も持っているのか、昨日と同じ黄色（バナナ）&ピンク（ストロベリー）。アリス様は、水色にピンク。……お二人は、“無難な色合い”や、“同系色”という言葉を知らないのだろうか。

「……め？　リイナ姫？」

遠くから聞こえたアルヴィン様の声に、私はふっと我に返った。
気付くと、目の前数十センチ先にアルヴィン様の顔。びくっとして、光の速さで顔を引く。

「あ、アルヴィン様！？　……すいません、色について……じゃない、あの、すこし考え事を……」

私は慌てて笑みを浮かべ、紅茶を啜る。
うん、おいしい。紅茶の味で、自分を落ち着かせ……、

「そのリイナ様の思考が、私のことについてだったら嬉しいのですが」

ることは、出来なかった。げほ、と紅茶を吹きそうになる。

「がははは、アルヴィンは本当にリイナ殿に惚れているな。リイナ殿、この息子が、ここまで一人の女性に夢中になるなど初めてのことです。もっとも、この息子に猛アピールされてここまで振り向かない女性も、リイナ殿くらいですがな」

国王様はそう言って、またがはははと笑う。

……私は、別にアルヴィン様に惚れられなくて結構です。というより、このアルヴィン様の変態みじた台詞で振り向く娘がこの国にそんなにいたのでしょうか。

そんな疑問で、頭がいっぱいになった。

「姫、子供ではないんですから紅茶を口いっぱい含むのはお止め下さい」（後書

なんか……タイトル、どうでも良くなっちゃってますね↑
いえ、これでも考えたんですよ？　でも……良いのが見つからなくて。↑

イルとアルヴィン、魅力的な男性になってくれるのはいつのことやら。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3746x/

天然王女の婚約者

2012年1月8日19時54分発行